青森県埋蔵文化財調査報告書　第612集

西張（３）遺跡Ⅲ
舘遺跡

－県道櫛引上名久井三戸線道路改良事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２０２０年３月

青森県教育委員会

調査区上空から西張（３）遺跡と舘遺跡を望む（南西から）

舘遺跡上空から名久井岳を望む（北東から）

館遺跡　第１号堀跡完掘（南西から）

館遺跡　第１号堀跡完掘（北東から）

舘遺跡　縄文時代後期の遺物出土状況（北から）

舘遺跡　第６号土坑遺物出土状況（北西から）

館遺跡　出土土器

館遺跡　出土動物形土製品

巻頭図版 4

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成30年度に県道櫛引上名久井三戸線道路改良事業予定地内に所在する西張（3）遺跡と舘遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、西張（3）遺跡では縄文時代の溝状土坑が検出され、狩猟域であることがわかりました。遺物は縄文時代の土器や石器が出土しました。舘遺跡では縄文時代の土坑や溝状土坑の他、中世と考えられる堀跡も見つかっています。遺物は主に縄文時代後期の土器や石器が多量に出土しました。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和２年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　　鈴　木　　学

例　言・凡　例

1　本報告書は青森県県土整備部道路課による、県道櫛引上名久井三戸線道路改良事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成30年度に発掘調査を実施した、南部町西張（3）遺跡と舘遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は西張（3）遺跡が1,700㎡、舘遺跡が1,700㎡である。

なお、西張（3）遺跡の発掘調査は東北新幹線建設工事の実施に先立ち平成6年度と同7年度に発掘調査が行われており、それぞれ『西張（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第197集、『石焼沢・西張（3）跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第213集として報告されている。

2　西張（3）遺跡の所在地は青森県三戸郡南部町大字法師岡字大道ノ下地内、青森県遺跡番号は445145、舘遺跡の所在地は青森県三戸郡南部町大字坪渡字舘地内、青森県遺跡番号は445116である。

3　発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した県土整備部道路課が負担した。

4　本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	西張（3）遺跡	平成30年4月25日～同年6月29日
	舘遺跡	平成30年9月4日～同年10月31日
整理・報告書作成期間		平成31年4月1日～令和2年3月31日

5　本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し青森県教育委員会が作成した。執筆及び編集は青森県埋蔵文化財調査センター齋藤岳総括主幹、齋藤正文化財保護主幹、木村恵理文化財保護主事が担当した。依頼原稿の執筆者名については文頭に記した。発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本報告書の内容が異なる場合においては本報告書が優先する。

6　発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

遺構測量（舘遺跡）	株式会社青秋
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
遺物写真撮影	有限会社無限
石器実測の一部	株式会社アルカ
プラント・オパール分析	株式会社パレオ・ラボ
遺物写真の切り抜き作業の一部	青森オフセット印刷株式会社

7　遺跡の地形・地質に関する現地鑑定及び原稿執筆、石器・石製品の石質鑑定は、国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師佐々木実氏に依頼した。

8　本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「苫米地」・「剣吉」・「三戸」・「市野沢」や『西張（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第197集、『石焼沢・西張（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第213集掲載の地図を複写・加工して使用した。

9　測量原点の座標値は、世界測地系（JGD2011）に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

10　遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と検出順位を示す算用数字を組合わせた番号を付した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。

溝跡＝SD、性格不明遺構＝SX、土坑＝SK、溝状土坑＝SV、ピット＝SP

11　土層の色調表記には、『新版土色帖』（小山正忠・竹原秀雄）を用い、遺跡の基本層序にはローマ数字、遺構内堆積土には算用数字を使用した。

12　遺構実測図の縮尺は堀跡の平面図は1/300、土坑、溝状土坑の平面及び堀跡の断面は1/40としてスケールを示した。事業計画路線図、遺構配置図は適宜縮尺を変更し、挿図毎にスケールを付した。

13　遺構実測図の土層断面図には、水準点を基にした海抜標高を付した。

14　遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。
土器＝P、石器＝S

15　遺物実測図の縮尺は原則として土器・礫石器は1/3（石斧類は1/2、石皿は1/6で掲載した）、土製品・剥片石器・石製品は1/2とし、挿図毎にスケールを付した。

16　図版中で使用した網掛けは以下の通りである。

土器：赤彩　石器：光沢・磨面

土器：黒色付着物　石器：アスファルト等の黒色付着物

17　遺物観察表における（　）内計測値は土器は復元値を、石器・石製品は残存値を示す。

18　遺物写真には、遺物実測図の図番号を付した。実測図の掲載を省き、写真のみで報告した遺物もある。縮尺は不同である。

19　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

20　発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の機関と方々からご協力・ご指導を得た（敬称略、順不同）。南部町教育委員会、御堂島正、布施和洋、野田尚志、船場昌子、中村隼人

目　　次

巻頭図版
序
例言・凡例
目次
挿図目次・表目次・写真図版目次
第１編　調査の概要と遺跡の環境
　第１章　調査の概要
　　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　第２節　調査及び整理体制 …… 1
　　第３節　調査の方法 …… 4
　　第４節　調査の経過 …… 5
　第２章　遺跡の環境
　　第１節　遺跡周辺の歴史的環境（縄文～古代） …… 7
　　第２節　遺跡周辺の歴史的環境（中世） …… 9
　　第３節　平館跡概略 …… 12
　　第４節　西張（３）遺跡及び舘遺跡の地形・地質について …… 15
第２編　西張（３）遺跡
　第１章　調査の概要
　　第１節　調査区と遺構・遺物の概要 …… 18
　　第２節　基本層序 …… 21
　第２章　検出遺構と出土遺物
　　第１節　溝状土坑 …… 22
　　第２節　出土遺物 …… 22
第３編　舘遺跡
　第１章　調査の概要
　　第１節　調査区と遺構・遺物の概要 …… 25
　　第２節　基本層序 …… 25
　第２章　検出遺構と出土遺物
　　第１節　堀跡 …… 31
　　第２節　溝跡 …… 31
　　第３節　性格不明遺構 …… 32
　　第４節　土坑 …… 32
　　第５節　溝状土坑 …… 35
　　第６節　ピット …… 35
　　第７節　遺構外出土遺物 …… 55
第４編　自然科学分析 …… 83
第５編　総括 …… 87
引用・参考文献 …… 100
遺物観察表 …… 103
写真図版 …… 117
報告書抄録 …… 149

挿図目次

図１　西張（３）遺跡・舘遺跡　位置図
図２　西張（３）遺跡・舘遺跡　事業計画路線図
図３　周辺の遺跡
図４　舘遺跡（平館跡）と周辺の城館位置図
図５　『南部諸城の研究』・『青森県の中世城館』・『福地村史　上巻』に掲載されている平館跡
図６　平館跡の縄張図
図７　(a) 西張（３）遺跡及び舘遺跡周辺の地形図
(b) 西張（３）遺跡及び舘遺跡周辺の地形段彩陰影図
図８　地質柱状図
図９　軽石Ｂ及び軽石Ｃの全岩化学組成
図 10　西張（３）遺跡　調査区域図
図 11　西張（３）遺跡　遺構配置図
図 12　西張（３）遺跡　基本層序
図 13　西張（３）遺跡　溝状土坑
図 14　西張（３）遺跡　出土土器
図 15　西張（３）遺跡　出土石器
図 16　舘遺跡　基本層序
図 17　舘遺跡　遺構配置図
図 18　舘遺跡　第１号堀跡
図 19　舘遺跡　第１号堀跡土層（A-A'～C-C'）
図 20　舘遺跡　第１号堀跡土層（D-D'・F-F'・G-G'）
図 21　舘遺跡　第１号堀跡土層（E-E'）
図 22　舘遺跡　第１号溝跡・第１号性格不明遺構
図 23　舘遺跡　第１～４号土坑
図 24　舘遺跡　第５～８号土坑・第１号溝状土坑
図 25　舘遺跡　遺構内出土土器１
図 26　舘遺跡　遺構内出土土器２
図 27　舘遺跡　遺構内出土土器３
図 28　舘遺跡　遺構内出土土器４
図 29　舘遺跡　遺構内出土石器
図 30　舘遺跡　遺構外出土土器１
図 31　舘遺跡　遺構外出土土器２
図 32　舘遺跡　遺構外出土土器３
図 33　舘遺跡　遺構外出土土器４
図 34　舘遺跡　遺構外出土土器５
図 35　舘遺跡　遺構外出土土器６
図 36　舘遺跡　遺構外出土土器７
図 37　舘遺跡　遺構外出土土器８
図 38　舘遺跡　遺構外出土土器９
図 39　舘遺跡　遺構外出土土器 10
図 40　舘遺跡　遺構外出土土器 11
図 41　舘遺跡　遺構外出土土器 12
図 42　舘遺跡　遺構外出土土器 13
図 43　舘遺跡　遺構外出土土器 14
図 44　舘遺跡　遺構外出土石器１
図 45　舘遺跡　遺構外出土石器２
図 46　舘遺跡　遺構外出土石器３
図 47　舘遺跡　遺構外出土石器４
図 48　舘遺跡　遺構外出土石器５
図 49　舘遺跡　遺構外出土石器６
図 50　舘遺跡　土製品１
図 51　舘遺跡　土製品２
図 52　舘遺跡　石製品
図 53　西張（３）遺跡　遺構配置図（平成６・７・30 年度調査）
図 54　舘遺跡　縄文時代の土坑・溝状土坑配置図
図 55　舘遺跡　石器・石製品　器種別・石材別数量
図 56　舘遺跡　珪質頁岩・玉髄製石器　器種別数量
図 57　舘遺跡　堀跡復元図

表目次

表１　舘遺跡　軽石記載
表２　ピット計測表
表３　舘遺跡　出土地点別　石器・石製品出土点数
表４　舘遺跡　遺構内外合計　石器・石製品石材別出土数量
表５　西張（３）遺跡　土器観察表
表６　西張（３）遺跡　石器観察表
表７　舘遺跡　土器観察表
表８　舘遺跡　石器・石製品観察表
表９　舘遺跡　土製品観察表

写真図版目次

巻頭図版１　上段　調査区上空から西張（３）遺跡と舘遺跡を望む（南西から）
　　下段　舘遺跡上空から名久井岳を望む（北東から）
巻頭図版２　上段　舘遺跡　第１号堀跡完掘（南西から）
　　下段　舘遺跡　第１号堀跡完掘（北東から）
巻頭図版３　上段　舘遺跡　縄文時代後期の遺物出土状況（北から）
　　下段　舘遺跡　第６号土坑遺物出土状況（北西から）
巻頭図版４　上段　舘遺跡　出土土器
　　下段　舘遺跡　出土動物形土製品

写真図版１　西張（３）遺跡　近景
写真図版２　西張（３）遺跡　調査区
写真図版３　西張（３）遺跡　出土遺物
写真図版４　舘遺跡　調査区
写真図版５　舘遺跡　遺構１
写真図版６　舘遺跡　遺構２
写真図版７　舘遺跡　遺構３
写真図版８　舘遺跡　遺構４
写真図版９　舘遺跡　遺構５
写真図版10　舘遺跡　遺構６
写真図版11　舘遺跡　遺構７
写真図版12　舘遺跡　遺構内出土土器１
写真図版13　舘遺跡　遺構内出土土器２
写真図版14　舘遺跡　遺構内出土土器３
写真図版15　舘遺跡　遺構外出土土器１
写真図版16　舘遺跡　遺構外出土土器２
写真図版17　舘遺跡　遺構外出土土器３
写真図版18　舘遺跡　遺構外出土土器４
写真図版19　舘遺跡　遺構外出土土器５
写真図版20　舘遺跡　遺構外出土土器６
写真図版21　舘遺跡　遺構外出土土器７
写真図版22　舘遺跡　遺構外出土土器８
写真図版23　舘遺跡　遺構外出土土器９
写真図版24　舘遺跡　遺構外出土土器10
写真図版25　舘遺跡　遺構外出土土器11
写真図版26　舘遺跡　遺構内出土石器
写真図版27　舘遺跡　遺構外出土石器１
写真図版28　舘遺跡　遺構外出土石器２
写真図版29　舘遺跡　遺構外出土石器３・石製品
写真図版30　舘遺跡　土製品１
写真図版31　舘遺跡　土製品２

第1編　調査の概要と遺跡の環境

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

県道櫛引上名久井三戸線道路改良事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱については、青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）と青森県県土整備部道路課及び三八地域県民局地域整備部（以下「事業者」）が平成28年度から継続的に協議・踏査を行っており、状況が整い次第、試掘調査を実施することとしていた。平成29年度に状況が整ったことから文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、西張（３）遺跡・舘遺跡ともに遺構や遺物が検出された。試掘調査の結果を受けた後の文化財保護課と事業者との協議で、両遺跡の本発掘調査は平成30年度に埋蔵文化財調査センターが行うこととなった。なお､西張（３）遺跡と舘遺跡に係る土木工事等のための発掘調査に関する通知書は、平成30年３月15日に三八地域県民局長名で提出され、現状保存が困難であることから、同年３月22日に青森県教育委員会教育長名で当該工事着手前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

第２節　調査及び整理体制

１　発掘調査体制

平成30年度は、平成29年度に行われた文化財保護課の試掘調査の結果により、西張（３）遺跡では開発用地杭№１～７間、舘遺跡では同じく№14～22間の発掘調査を行うこととした。西張（３）遺跡はこれまでの調査結果から縄文時代が主体の、舘遺跡は伝承等から中世が主体の遺跡であり、両遺跡とも遺構・遺物の検出と層位的な調査に主眼をおいて発掘調査を進めることとした。

発掘調査体制は以下のとおりである。

〔平成30年度〕

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	安田　正司	（平成31年３月定年退職）
	次長（総務ＧＭ）	黒滝　雅信	（平成31年３月定年退職・現県教育庁学校施設課主幹専門員）
	調査第二ＧＭ	笹森　一朗	
	総括主幹	齋藤　岳	（発掘調査担当者）
	文化財保護主幹	齋藤　正	（発掘調査担当者）
	文化財保護主事	木村　恵理	（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調　査　員	三浦　圭介	青森中央学院大学非常勤講師	（考古学）
〃	福田　友之	元青森県立郷土館副館長	（考古学）
〃	佐々木　実	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師	（地質学）

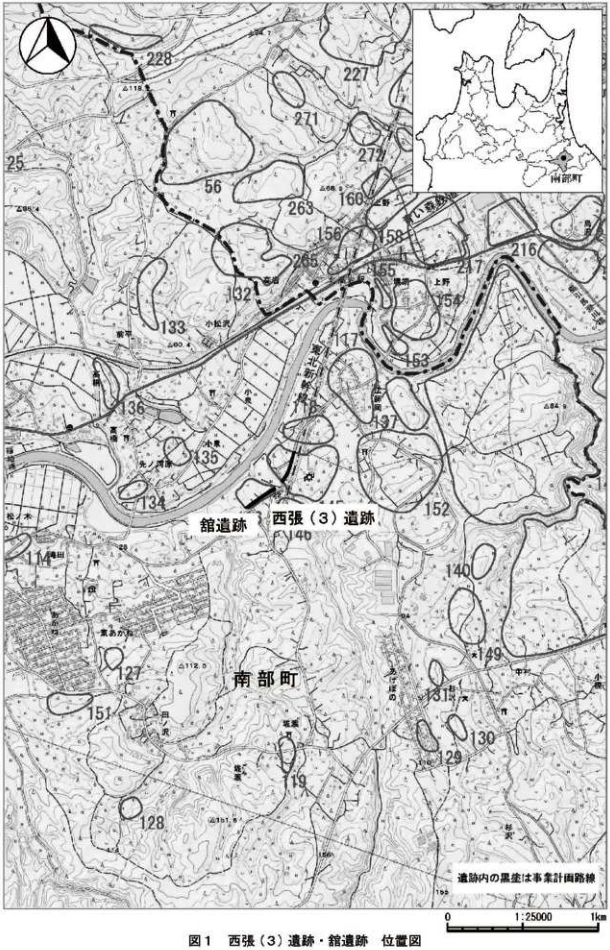


図１　西張（3）遺跡・舘遺跡　位置図

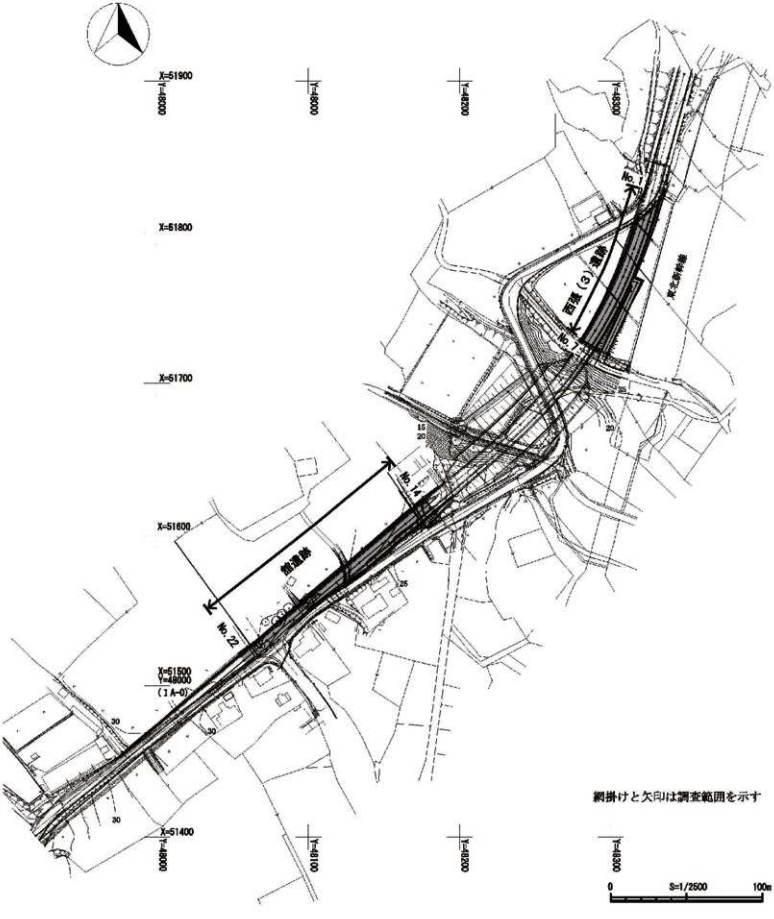


図２　西張（３）遺跡・館遺跡　事業計画路線図

2　整理・報告書作成体制

整理・報告書作成体制は、発掘調査に携わった職員で構成する。

［平成31・令和元年度］

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	鈴木　学
	次長（総務GM）	川村　和夫
	調査第二GM	笹森　一朗
	総括主幹	齋藤　岳　（報告書作成担当者）
	文化財保護主幹	齋藤　正　（報告書作成担当者）
	文化財保護主事	木村　恵理　（報告書作成担当者）

（笹森）

第３節　調査の方法

1　発掘調査の方法

［測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定］　測量基準点と水準点については世界測地系に基づく既知点を利用した。水準原点については、西張（３）遺跡は３級基準点 L00L00177-01(26.098m)を用い、用地幅杭に水準点移動を行った。舘遺跡は３級基準点 L00Q00106-01(24.863m)を用い、用地幅杭に水準点移動を行った。グリッドの設定は、１グリッド４×４m、原点は平面直角座標第Ⅹ系のX＝ 51500、Y＝ 48000である。南から北方向にアルファベットとローマ数字を組み合わせ、西から東方向に算用数字を付し、南西隅の組み合わせで呼称した。原点はⅠA-0である。

［基本層序］　各遺跡の基本層序については表土から順にローマ数字をつけて呼称した。

［表土等の調査］　文化財保護課が実施した試掘調査の結果を踏まえ、状況を確認しながら重機を使用し、掘削の省力化を図った。

［遺構の調査］　検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて設定した。遺構内の堆積土層には確認面から層序番号を算用数字で付し、ローマ数字を付けた基本層序と区別した。遺構の測量に関しては、西張（３）遺跡と舘遺跡の土坑や柱穴の一部はトータルステーションによる測量点を元に(株)CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）を用いて行った。舘遺跡のそれ以外の遺構平面図、地形測量、堀跡等の堆積土の図化などに関しては業者に委託しており、３Ｄスキャナーを用いた「３Ｄレーザースキャナー計測」やトータルステーションによる測量で行った。遺構内の出土遺物については、層位毎又は堆積土一括で取り上げ、必要に応じて出土状況図や遺物分布図を作成した。

［遺物包含層の調査］　上層から層位毎に人力で掘削した。遺物の出土は散発的であり、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。

［写真撮影］　原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び約1800万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影も行った。

２　整理・報告書作成作業の方法

［図面類の整理］　西張（３）遺跡は、トータルステーションで作成された測量データを、(株)CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）で読み込み整理を行った。舘遺跡は「３Ｄレーザースキャナー計測」やトータルステーションで作成された測量データを、(株)CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）で読み込み整理を行った。土坑などは原則として縮尺 1/40で図化し、簡易遣り方測量等で作成した土層断面図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

［写真類の整理］　35㎜モノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35㎜カラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35㎜カラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付け、ハードディスク・ＤＶＤ等に保存した。

［遺物の洗浄・注記と接合・復元］　遺構内出土遺物を優先的に接合し、復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土地点・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等も留意しながら行った。

［報告書掲載遺物の選別］　遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構の構築・廃棄時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、時代・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

［遺物の観察・図化］　充分に観察した上で、各遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。土器の中で、拓本で表現しきれない文様・調製等の凹凸がある遺物については実測図を作成した。また、種別毎に遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

［遺物の写真撮影］　業者に委託して行い、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

［自然科学分析］　遺構内から採取した土壌に関する分析を行った。

［遺構・遺物のトレース・版下作成］　遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、(株)CUBIC製「遺構くん」（遺構実測支援システム）、「トレースくん」（遺物実測支援システム）、Adobe社製 Creative Cloudの「Illustrator」を用いた。図版の版下作成は Adobe社製 Creative Cloudの「PhotoShop」、「Illustrator」を用いて行った。

［遺構の検討・分類・整理］　遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

［遺物の検討・分類・整理］　遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

第４節　調査の経過

１　発掘調査の経過

西張（３）遺跡の調査は平成30年４月25日～６月29日、舘遺跡の調査は同年９月４日～ 10月31日の期間で行った。発掘作業の経過は以下の通りである。

西張（3）遺跡

4月25日　発掘調査器材を搬入して調査を開始した。

5月上旬　重機を使用して表土除去を進めた。調査区南側は削平され、調査区北側は包含層が残存している状況を確認した。試掘調査で確認された溝状土坑の精査を行った。

6月　調査区北側の調査を進めた。

6月29日　全ての調査を終了し、調査器材を撤収した。

館遺跡

9月4日　発掘調査器材を搬入して、調査区北東側から重機による表土除去を進めた。

9月上旬　中世の堀跡、縄文時代の土坑や溝状土坑を検出し、遺構精査を開始した。

10月上旬　縄文時代の遺構精査は終了し、堀跡の精査を進めた。

10月26日　現地見学会を開催した。

10月31日　全ての調査を終了し、調査区の埋め戻しを行い、調査器材を撤収した。

2　整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は平成31年度に実施することになったが、写真類の整理作業及び遺構図面の整理作業の一部は、調査終了後の平成30年11月中に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成31年4月1日から令和2年3月31日までの期間で行った。発掘調査では両遺跡合わせて段ボール箱換算で59箱の土器類や石器類が出土している。このことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総頁は170頁で、遺構や遺物の数に応じて各々の記載にあてることにした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

〔平成31・令和元年度〕

4～5月　平成30年度発掘調査出土遺物の計量・接合・復元作業を行った。

6月～　出土遺物の接合・復元・図化作業を行うとともに、遺構や断面図の修正作業を行った。

7～9月　出土遺物の図化作業を行うとともに、トレース作業を開始した。また、遺構図面のトレース作業を開始した。

10月～　引き続き、出土遺物の図化・トレース作業を行うとともに、遺構図版及び写真図版作成作業を開始した。また、報告書掲載遺物観察表の作成を開始した。

11月～　図版作成作業及び報告書掲載遺物観察表の作成を継続した。また、遺物の写真撮影を行うとともに、調査成果を総合的に検討し、報告書の原稿作成を開始した。

12～1月　遺物写真図版を作成した。また、原稿・版下が揃ったので、報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定した。印刷業者との契約事務が完了した後、原稿及び版下を入稿した。

2月～　校正及び記録類・出土遺物等の整理を行った。

3月11日　3回の校正を経て報告書を刊行した。

3月下旬　記録類・出土遺物等を整理して収納した。　（齋藤正）

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡周辺の歴史的環境（縄文～古代）

周辺の遺跡

西張（３）遺跡・舘遺跡は馬淵川右岸の段丘上に位置している。図３に西張（３）遺跡・舘遺跡及び周辺の遺跡の位置を示した。この周辺では、多くの遺跡が確認され、東北新幹線や東北縦貫自動車道路の建設に伴う発掘調査が実施されている。舘遺跡が中世城館「平館跡」として古くから知られているため、ここでは縄文時代～古代の遺跡について概観し、周辺の城館及び中世については第２節で記述することとする。

［縄文時代］

【草創期】 南部町では検出例がないが、八戸市櫛引遺跡では竪穴建物跡、土坑、集石遺構が検出されている。遺物は爪形文土器、多縄文系土器、石器が出土している。特に多縄文系土器は特筆される。

【早期】 西張（３）遺跡の北東に位置する西張（２）遺跡では、縄文時代早期中葉の竪穴建物跡や土坑が検出された。櫛引遺跡は早期中葉の竪穴建物跡、フラスコ状土坑、円形の落とし穴が検出されている。八戸市上野平（３）遺跡では円形の落とし穴が検出されている。

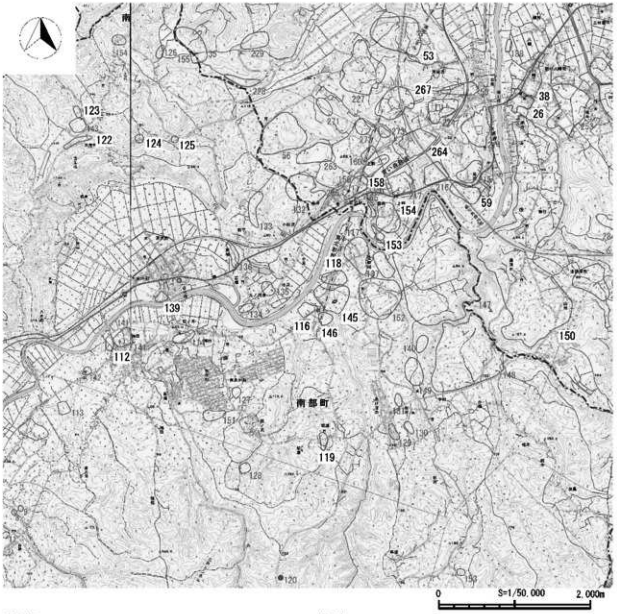
【前期】 苫米地舘野遺跡（平成 18 年に館野遺跡から名称変更）では円筒下層ａ～ｄ式土器が出土しており、円筒下層ｄ$_1$式が最も多く出土している。遺構は土坑が検出されている。

【中期】 苫米地舘野遺跡では中期前葉・中葉の円筒上層ａ～ｄ式期の土坑・屋外炉・焼土遺構が検出されている。土坑の多くはフラスコ状土坑であり、列状に配置されている。竪穴建物跡が検出されていないものの集落が近隣にあったと推定される。当該期の資料が少ない南部町において貴重な調査である。雷遺跡では、溝状土坑が検出されている。遺物は円筒上層ｄ・ｅ式の出土が多いことから当該期が主体と思われる。西久根遺跡では円筒上層ａ式期の竪穴建物跡が検出されている。

【後期】 苫米地舘野遺跡から後期前葉の十腰内Ⅰ式期の竪穴建物跡が検出されている。また、溝状土坑も検出されている。苫米地西山遺跡（平成 18 年に西山遺跡から名称変更）では後期初頭の土器片の中には樹木文やシカと思われる動物文が粘土紐の貼付で表現されている狩猟文土器の出土がある。西張（２）遺跡では後期中葉の竪穴建物跡２棟、後期末葉から晩期の竪穴建物跡１棟、土坑、集石遺構が検出されている。遺物は十腰内Ⅱ～Ⅲ式が主体である。石焼沢遺跡では遺構は検出されていないが、後期前葉の遺物が出土している。苫米地館遺跡では十腰内Ⅰ式の切断蓋付壷形土器の土器埋設遺構が検出された。上野平（３）遺跡からは溝状土坑が検出された。八戸市上明戸遺跡では十腰内Ⅲ式期の竪穴建物跡が検出された。

【晩期】 馬淵川を南にさかのぼった標高100～110ｍの丘陵にある堀渡遺跡では、晩期の竪穴遺構とフラスコ状土坑が検出された。遺物は遺物包含層から多量の完形土器が出土し、大洞Ｂ式と大洞ＢＣ式に属する土器が大半を占める。この他、石器、土製品や石製品が出土した。八戸市八幡遺跡では大洞Ｂ式期あるいは若干さかのぼる時期の竪穴建物跡が検出された。土坑、土坑墓、屋外炉、捨て場が検出されている。遺物は晩期前半が主体を占める。

［弥生時代］ 苫米地西山遺跡から弥生時代中期後葉の念仏間式期の竪穴建物跡３棟と土坑が検出された。弥生時代中期後葉の集落の調査例は少ないことから注目される遺跡である。八幡遺跡では弥生時代前期の砂沢式期の竪穴建物跡が検出された。壁際に溝が巡らされており、３回の改築が行われてい



南部町

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
112	西久保遺跡	縄文(早～後)、平安、中世	集落跡
116	**館遺跡**	**縄文(後)、奈良、平安、中世**	**散布地 城館跡**
118	西張（2）遺跡	縄文(早・後)	集落跡
119	堀端遺跡	縄文(後・晩)	散布地
122	苫米地餅野遺跡	縄文(前・中・後)	集落跡
124	富遺跡	縄文(早～後)、平安	散布地
125	苫米地西山遺跡	縄文(早～晩)、平安	生産跡
139	苫米地館遺跡	中世	城館跡
145	**西張（3）遺跡**	**縄文(早～晩)、弥生(前)、中世**	**集落跡 散布地 城館跡**
146	石放沢遺跡	縄文(後)、弥生	散布地

八戸市

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
26	八幡遺跡	縄文(晩)、弥生(前)、奈良、平安、中世、近世	散布地 集落跡 社寺跡
38	千石屋敷遺跡	縄文(晩)、奈良、平安、中世、近世	散布地 生産跡
53	狐ノ沢平遺跡	縄文(中・後)、奈良、平安、中世、近世	散布地 集落跡
59	是場遺跡	縄文(前～晩)、弥生	集落跡
150	櫛引遺跡	縄文(草～晩)、奈良、平安、中世、近世	生産跡 城館跡
153	上切戸遺跡	縄文(後・晩)、奈良、平安	生産跡
154	堀端（1）遺跡	縄文(前・晩)、弥生、奈良、平安、中世、近世	散布地 生産跡
158	白蛇遺跡	縄文(後・晩)、奈良、平安	散布地 生産跡
264	上野平（3）遺跡	縄文(後)、奈良、平安	散布地 生産跡
267	人首沢遺跡	縄文(後)、奈良、平安	集落跡

図３　周辺の遺跡

る。また、達賀川系土器も出土している。種子同定が行われ、栽培植物種子の数量は全体の８割以上を占め、コメが多い結果が出た。上野平（３）遺跡では弥生時代前期、八戸市昼場遺跡では弥生時代後期の遺物を確認している。

[飛鳥時代] 八幡遺跡、八戸市白蛇遺跡、八戸市人首沢遺跡では飛鳥～奈良時代の集落跡が確認されている。

[奈良時代] 櫛引遺跡では竪穴建物跡が28棟確認され、規模が５～６ｍの大型建物跡と２ｍ程の小型建物跡が重複も少なく整然とした配置である。八戸市岩ノ沢平遺跡は９棟の竪穴建物跡が検出されている。上野平（３）遺跡、八戸市堀端（１）遺跡、上明戸遺跡でも竪穴建物跡が確認されている。

[平安時代] 西久根遺跡からは９世紀代の竪穴建物跡が検出された。南部町内での平安時代の竪穴建物跡の検出は初例である。上野平（３）遺跡、櫛引遺跡、岩ノ沢平遺跡において集落跡が確認されている。櫛引遺跡では竪穴建物跡が21棟検出され、小型建物跡と大型建物跡がほぼ等間隔に存在する。９世紀代から10世紀前葉の集落であることが確認されている。岩ノ沢平遺跡では竪穴建物跡166棟が遺跡の中央部から東側に整然と広がっている状況で検出された。その他の遺構は掘立柱建物跡、鍛冶炉、土坑が検出されている。特筆される遺物として土馬が出土しており、祭祀に使用されたと思われる。集落は９世紀中葉頃から営まれ、10世紀中頃には廃絶している。

第２節　遺跡周辺の歴史的環境（中世）

周辺の城館跡

舘遺跡（平館跡）が所在する南部町は三戸南部氏が本拠とした国史跡「聖寿寺館跡」を始め、27ヶ所の中世城館が遺跡登録されている。隣接する三戸町には天文８年(1539)に赤沼備中の放火による聖寿寺館焼失後に本拠とした「三戸城跡」が存在している。同じく隣接する八戸市には根城南部氏の本拠である国史跡「根城跡」が存在する。このように舘遺跡（平館跡）の周辺は三戸・根城の両南部氏にとってゆかりの深い土地であるといえる。

図４は舘遺跡（平館跡）と周辺の城館を示したものである。なお、遺跡登録と城館の名称が異なる城館があるが、ここでは、城館名で記載している。発掘調査が行われているのが、聖寿寺館跡、平良ヶ崎城跡、佐藤館跡、法師岡館跡、苫米地館跡、福田館跡、森ノ越館跡、鳥舌内館跡、三戸城跡、中野館跡である。この他、自治体史の刊行に伴い縄張調査が行われている城館としては杉沢館跡、櫛引城がある。これらの城館について概要を述べることとする。

聖寿寺館跡（南部町字小向）

馬淵川左岸の河岸段丘上に立地している。馬淵川支流の猿辺川及び鱒沢に臨む段丘崖と堀跡で区画されている。三戸南部氏の本拠であったが、天文８年に焼失し、三戸南部氏の本拠は三戸城になったという。発掘調査は平成６年から継続して行われ、遺構は竪穴建物跡、掘立柱建物跡、堀跡、土橋、虎口が検出されている。遺物は青磁、白磁、染付、瑠璃釉といった中国産陶磁器、瀬戸・美濃、越前焼等の国産陶磁器、石製品、金属製品等が出土している（南部町教育委員会2019他）。

平良ヶ崎城跡（南部町字沖田面）

馬淵川左岸の河岸段丘上に立地している。近世に編纂された記録によると初代南部光行が甲斐国より糠部に入部後、建久３年(1192)に築城したと伝わる。堀跡で区画され、南古館と北古館の２つの曲

輪から構成される。町道改良工事に伴う発掘調査が行われ、竪穴建物跡、柱穴群、整地層、堀跡が検出された。遺物は青磁、青白磁、白磁、染付、珠洲、瀬戸・美濃が出土した。遺物から15世紀代を主体とし、聖寿寺館より早く廃絶をした可能性が考えられるという（南部町教育委員会2011）。

佐藤館跡（南部町字沖田面）

平良ヶ崎城跡の西側、小河川に浸食された河岸段丘上に立地している。発掘調査で遺構は竪穴建物跡、掘立柱建物跡等が検出されている。遺物は青磁、染付、瀬戸・美濃、金属製品、銭貨等が出土している。年代は遺物から15～16世紀である（南部町教育委員会2001）。

法師岡館跡（南部町大字法師岡）

馬淵川右岸の丘陵上に立地している。北は馬淵川、東側は急崖となっている。館跡の西側から南側にかけては三重堀が巡っており、地形を上手く利用し、防御性を高めた縄張りである。館主は櫛引氏一族の小笠原兵部、あるいは櫛引清長の弟清政と伝わる。天正19年（1591）の九戸の乱では九戸方に付き、九戸城に入城したという。その後、根城南部氏と中野館の中野氏から攻撃を受け、落城したと伝わる。発掘調査で遺構は三重の堀跡、土塁、道路跡、竪穴建物跡等が検出され、遺物は青磁の香炉、染付皿等が出土している。城館の年代は遺物から15～16世紀である（青森県教育委員会2005）。

杉沢館跡（南部町大字杉沢字館）

馬淵川から約1㎞東に立地している。自然の沢と二重堀で囲まれていたというが、改変を受けており不明な部分が多い。館主は明らかではないが、天正年間には櫛引氏の勢力下にあり上野氏が居城としたという。また、南部利直の家臣であった杉沢掃部とも伝わる（福地村2005）。

苫米地館跡（南部町大字苫米地）

馬淵川左岸の沖積段丘上に立地している。館主は苫米地因幡と記録され、天正19年に櫛引清長の攻撃を受けたが撃退したと史料に残る。三戸南部氏の正月行事を伝えた『奥南旧指録』巻5附録にある「古代三戸年頭御規式之事」には「十人ノ外様」の一人として人馬別（苫米地）が記されており、三戸南部氏の家臣であったことがわかる。試掘調査で遺構は竪穴建物跡とみられる落ち込みと土坑が検出されている。遺物は青磁皿・碗、白磁皿、染付皿、瀬戸・美濃、志野、埋納銭が出土している。年代は15～16世紀である（福地村教育委員会1997）。

福田館跡（南部町大字福田）

馬淵川の右岸、台地の北端に立地している。規模は東西230m、南北170mである。三重の堀を巡らしていたという。館主に福田掃部、福田治部の名前が伝わる。発掘調査で堀跡が検出されている（青森県教育委員会2004）。

森ノ越館跡（南部町大字森越）

馬淵川右岸の小谷に挟まれた段丘上に立地している。館主は北重左衛門と伝わる。館の大きさは東西・南北共に約200mである。館跡は単郭であり、東側の堀跡は発掘調査が行われ、薬研状の二重の堀跡が検出されている（名川町教育委員会1999）。

鳥舌内館跡（南部町大字鳥舌内）

台地の先端部に立地している。発掘調査が行われ、竪穴建物跡、堀跡、土塁等が検出されている。遺物は染付、瀬戸・美濃が出土しており15～16世紀に機能していたことが明らかになった（青森県教育委員会2017）。

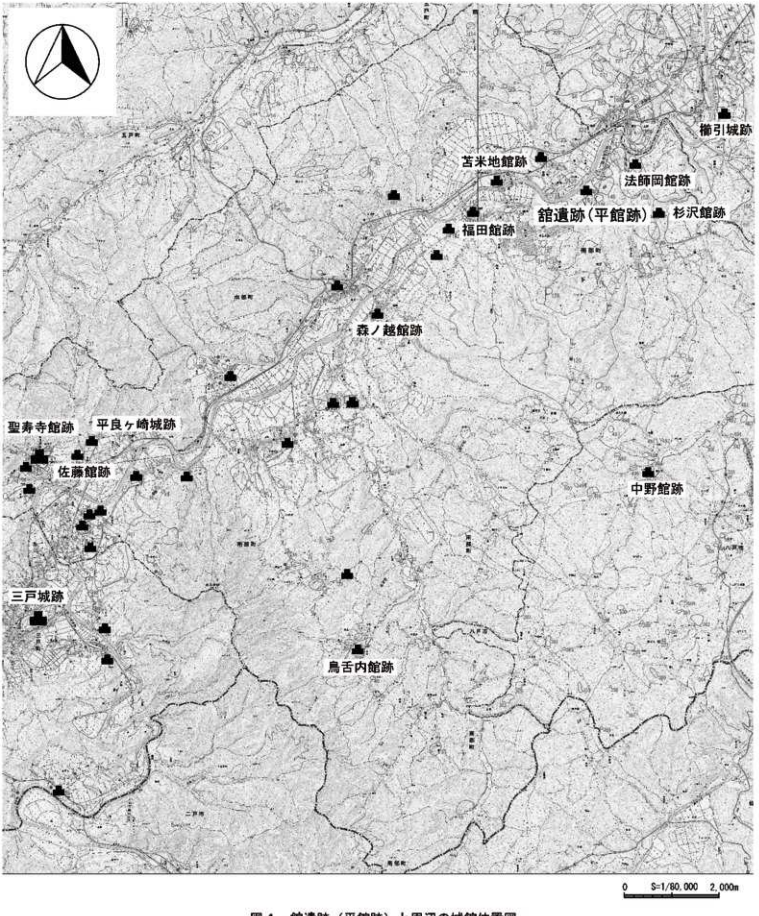


図４　館遺跡（平館跡）と周辺の城館位置図

三戸城跡（三戸町大字梅内）

馬淵川と熊原川の合流点に位置し、両河川に浸食された河岸段丘上に立地している。築城年代は不明であるが、聖寿寺館以後に三戸南部氏の本拠となった。寛永10年（1633）に盛岡城が居城と定められた後は、古城と称され、城代が置かれた。貞享年間（1684～1688）に城代が廃止されてからは、三戸代官所の管轄に属した。平成16年から発掘調査が継続して行われており、大御門跡の礎石や石垣跡、鍛冶炉等が検出されている。遺物は15世紀代の陶器が出土しており、当該期から土地利用されていたと考えられる。他には瓦や羽口が出土している（三戸町教育委員会 2019他）。

櫛引城跡（八戸市大字櫛引）

櫛引八幡宮の南方２kmの馬淵川右岸に立地している。単郭の城跡である。北・東・南側は大規模な堀跡で囲まれ、西側は馬淵川に面した断崖となっている。城主は櫛引氏である。九戸政実の乱において根城南部氏の攻撃を受けて落城している。

中野館跡（八戸市南郷区大字中野）

頃巻川左岸の低位段丘上に立地している。館の起源・由来は明らかではないが中野氏代々の居館と伝わる。館跡は３つの曲輪からなる。発掘調査が行われ、遺構は堀跡や土塁が検出され、遺物は中世陶磁器や馬櫛等が出土している（青森県教育委員会2004）。

第３節　平館跡概略

館遺跡（平館跡）について

館遺跡は中世城館の平館と伝わっている。館跡は馬淵川右岸の台地先端に立地している。北西部は馬淵川に面して、南西部と北東部は大規模な沢がある。標高約25～27mである。現況は宅地、畑地、墓地として利用されている。館跡の南側には平集落が広がる。

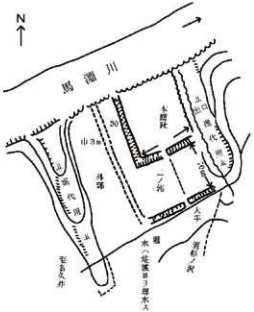
平館跡は『南部諸城の研究』（沼館愛三1976）に報告されたのが初見である。この後、『青森県の中世城館』（青森県教育委員会1983）で報告され、これらを元にして『福地村史　上巻』（福地村2005）では推定図が作成・報告されている。これまで報告されている図をまとめたものが図５である。

いずれの報告においても館跡はＬ字状の堀を二重に巡らせ、本郭（曲輪１）と二ノ郭（曲輪２）を配置、外側のＬ字状の堀と南西部の沢の間に外郭（曲輪３）を配置する縄張りは共通している。しかし、出入り口については『南部諸城の研究』では南側を大手、西側を搦手に想定している。大手としている部分は、現在、県道櫛引上名久井三戸線から郭内の墓地に通じる道である。一方、『福地村史　上巻』では、聞き取りの結果から、この部分が大手であることを否定している。

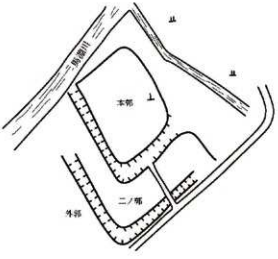
館の性格については『南部諸城の研究』では、河岸交通路に接する土豪の居館であり、伝ええる城或いは、監視歩哨的任務を持ったとしている。また『福地村史　上巻』では上級武士の屋敷跡と考えられている。

縄張りについて

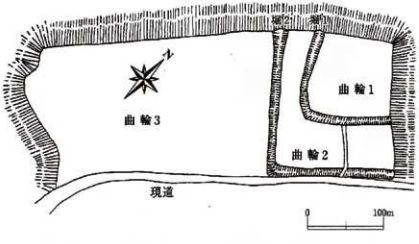
今回調査にあたり、新たに作成した平館跡の縄張りについては図６のとおりである。現況では、内側の堀跡がＬ字状に浅く窪んでおり目視でも確認できる。この堀跡は空中写真でも観察することができる（巻頭図版１）。全長約200m、幅は約８～10mである。外側の堀跡は北側部分が窪みとして確認でき、長さ約65m、幅約８m残存している。その他の部分は埋め立てにより確認することはできない。



縄張図（『南部諸城の研究』）



縄張図（『青森県の中世城館』）



平館跡の推定図（『福地村史』上巻所収の図を一部修正）

図5　『南部諸城の研究』・『青森県の中世城館』・『福地村史　上巻』に掲載されている平館跡

曲輪の規模は内側の堀跡に区画されている本郭が東西約120m、南北約125mである。二ノ郭は堀が埋められていることもあり不明である。外郭は平坦な地形が続き、堀や土塁といった遺構を確認することができない。このため外郭（曲輪3）としている部分は郭である可能性は低いと思われる。

館主について

館主を記述した同時代の史料は見当たらないが、『南部諸城の研究』や『福地村史　上巻』では小笠原氏一族上野氏としている。上野氏は九戸の乱の際に櫛引城の櫛引氏と共に九戸城へ入城したという。

櫛引城主の櫛引氏は「小笠原氏系図・櫛引八幡宮別当善門院系図」によると本名小笠原であり、櫛引

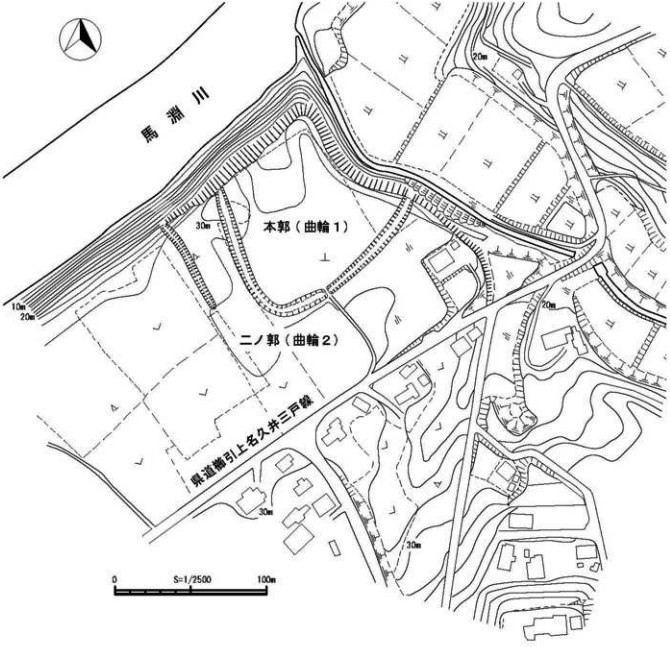


図６　平館跡の縄張図

八幡宮別当普門院家の庶流とされ、一族の小笠原氏を配置して馬淵川沿岸部の所領を支配していたと記録されている（八戸市2014・2015）。

また、江戸時代に編纂された史料には、九戸城に入城した者の中に上野姓を名乗る人物が記載されており、「上野左衛門」（『南部根元記』）、「上野十郎左衛門」（『九戸軍記　上』）、「上野左衛門尉」（『奥羽永慶軍記』）とある。これらの史料から判断すると、名前に若干の差違が見られるが上野姓の人物が籠城したのは間違いないと思われる。平館跡の館主が上野氏とは断言できないが、系図や史料から推定すると館主であった可能性は否定できないと思われる。（齋藤正）

第４節　西張（３）遺跡及び舘遺跡の地形・地質について

国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科　佐々木　実

位置及び地形

西張（３）遺跡及び隣接する舘遺跡は、馬淵川の右岸に位置する。遺跡周辺の地形図及び地形段彩陰影図を図７に示す。遺跡周辺を含む馬淵川流域の両岸には明瞭な段丘地形が認められ、両遺跡の大半は標高20～25mの段丘面上に位置し、西張（３）遺跡の一部は標高30～50mの段丘面上にある。両者の段丘面は、宮内(1985)では「柴山面」及び「根城面」、鎌田(1987)では「第２段丘」及び「第１段丘」、松山(1983)を引用した川村・堀田(2001)では「低位段丘(高位)」及び「高館段丘及び種市段丘」（いずれも低位―高位の順）とされている。

舘遺跡の地質

舘遺跡の第１号堀跡において地層断面の観察を行い柱状図を作成した。結果を図８に示す。

最下位には礫岩が認められ、段丘礫と解釈される。その上位には火山灰質土壌中に３層の軽石凝灰岩層が認められる。各層から軽石を採取し（下位より、軽石Ａ～Ｃ）、粒径250μｍ以下に粉砕し，スミアスライドによりガラス及び含有鉱物を観察した。分析結果を表１に示す。軽石Ｂ及び軽石Ｃについては、粒径１cm以上の軽石粒子を選び、粉砕し蛍光Ｘ線分析により主要成分全岩化学組成を測定した。結果の一部を図９に示す。

軽石凝灰岩の対比と段丘面

軽石Ｃは、普通角閃石を含むこと、及び全岩化学組成の特徴が一部の元素を除き、工藤（2019）による八戸火砕流堆積物の組成範囲内にあることから、同火砕流堆積物に対比できる（図９）。前述の「柴山面」、「第２段丘」、「低位段丘(高位)」はいずれも八戸火砕流堆積物（八戸火山灰）以降の火砕堆積物を載せる段丘面とされており、今回の観察結果と調和する。軽石Ｂは含有鉱物として普通角閃石を含まないことからは大不動火砕流堆積物に対比されることも考えられるが、全岩化学組成は、風化・変質の影響を考慮しても大きく異なり、大不動火砕流堆積物とは対比できない。軽石Ｂと軽石Ｃとの間には土壌を挟まないため、軽石Ｂは八戸降下テフラのうちで比較的SiO_2含有量が乏しく、普通角閃石含有量がごく微量のため見いだされなかったものであると考えられる。下位の軽石Ａは大不動火砕流堆積物と考えても矛盾はないが、データが不十分のため対比は不確実である。段丘礫と八戸火砕流堆積物の間に他の軽石凝灰岩が認められることにより、遺跡の位置する段丘面は従来考えられていたよりも古い(高位の)段丘面である可能性があるが、その形成年代は今のところ確定できない。

引用文献

川村　正・堀田報誠（2001）　青森県史　自然編　地学、第１章 大地の風貌（地形）、４．４ 県東部の大地，青森県史編さん自然部会、青森県．70-72.

工藤　崇（2019）　「和田地域の地質、第７章　「和田火山噴出物（中部更新統～完新統），地域地質報告（５万分の１地質図幅）．産総研地質調査総合センター、114-154.

松山　力（1983）　八戸の地質．八戸文化財シリーズ、八戸市教育委員会、24、60p.

宮内崇裕（1985）　上北平野の段丘と第四紀地殻変動．地理学評論、Ser.A、58、492-515.

鎌山廉彦（1987）　馬淵川中流域における段丘地形について、弘大地理、23、11-20.

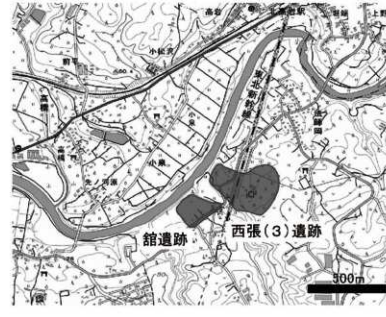


図7

(a) 西張（3）遺跡及び舘遺跡周辺の地形図.
国土地理院「地理院地図」（https://maps.gsi.go.jp/）のデータから、「カシミール3D」（http://www.kashmir3d.com/）により作成.

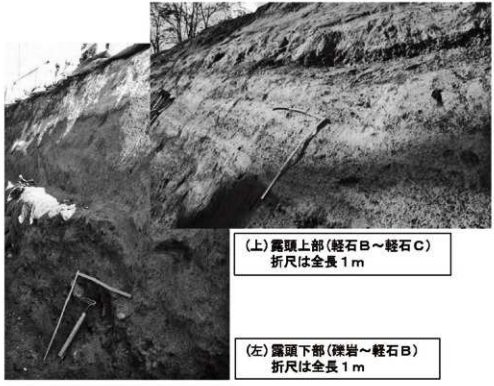
(b) 西張（3）遺跡及び舘遺跡周辺の地形段彩陰影図.
「カシミール3D」（http://www.kashmir3d.com/）の「スーパー地形セット」により作成.

表1 舘遺跡　軽石記載

	pm	pl	opx	aug	ho	opq
軽石C	○	○	○	○	○	○
軽石B	○	○	○	○		○
軽石A	○	○	○	○		○

pm:軽石型ガラス，pl:斜長石，opx:直方輝石(斜方輝石)，
aug:普通輝石，ho:普通角閃石，opq:不透明鉱物

図8　地質柱状図



(上)露頭上部(軽石B～軽石C)
折尺は全長1m

(左)露頭下部(礫岩～軽石B)
折尺は全長1m

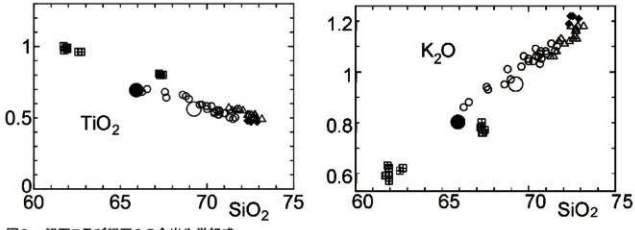


図9　軽石B及び軽石Cの全岩化学組成

工藤(2019)による十和田火山カルデラ形成期噴出物の組成との比較を示す。軽石Cの組成は八戸火砕流堆積物及び八戸降下テフラの組成範囲に入る。軽石Bは八戸火砕流堆積物及び八戸降下テフラの、SiO_2 に乏しい側の延長に位置し、大不動火砕流堆積物及び切田テフラ、霧井火砕流堆積物（工藤、2019）とは組成が異なる。

第2編　西張（3）遺跡

第１章　調査の概要

第１節　調査区と遺構・遺物の概要

西張（3）遺跡は南部町東部に位置し、馬淵川右岸の段丘上に所在している。平成６・７年度に青森県教育委員会が東北新幹線建設事業に伴い発掘調査を実施している(図10)。

平成６年度は、平成30年度調査区から東に約50m離れた地点を調査しており、縄文時代の竪穴建物跡１棟、集石遺構１基、土坑２基、円形の落とし穴１基、溝状土坑３基が検出された。竪穴建物跡及び土坑、集石遺構の時期は縄文時代早期である。溝状土坑の時期は縄文時代中期～後期と思われる。この他、濠跡１条、近世以降の溝状遺構６条が検出された。遺物は縄文土器と石器、土製品が出土している。縄文土器は縄文時代早期～前期・後期が確認されたが、早期と後期が大半を占める。縄文時代早期の土器は押型文土器と貝殻・沈線文系土器(白浜・小舟渡平式、根井沼・寺の沢式)が出土し、縄文時代後期の土器は十腰内Ⅰ式が出土している。石器は剥片石器(石鏃、石匙、不定形石器)、礫石器(磨製石斧、石錘、凹石、磨石)が出土している。土製品は円盤状土製品、キノコ形土製品が出土している(青森県教育委員会1996)。

平成７年度は、平成30年度調査区の南側を調査している。縄文時代の配石遺構１基、土坑14基、溝状土坑５基が検出された。配石遺構の時期は後期～晩期、土坑と溝状土坑の時期は中期～後期と思われる。縄文時代以外の遺構では、土坑１基、焼土遺構１基及び溝跡４条、濠跡２条が検出されている。濠跡を除く遺構は弥生時代以降に構築されたと思われる。濠跡は平成６年度調査で検出された濠跡から続くものであり、全長95m、幅2.8～11m、深さ1.9～6.5mと大規模である。構築時期は遺物が出土していないため不明であるが、規模と形状から古代以降と推定されている。遺物は縄文土器、弥生土器と石器が出土している。縄文土器は平成６年度調査と同様な出土傾向を示している。弥生土器は砂沢式の浅鉢形土器が出土している。石器は剥片石器(石鏃、石匙、石篦、楔形石器、不定形石器)、礫石器(磨製石斧、打製石斧、石錘、敲石、石皿)が出土している(青森県教育委員会1997)。

これらの発掘調査成果から西張（3）遺跡は、縄文時代早期に集落、縄文時代早期と中期～後期に狩猟場、古代以降に館として利用されたことが判明している。

平成30年度の発掘調査区は、平成29年度に実施された文化財保護課による試掘調査の結果、工事用センター杭№１～７の範囲となった(図２)。発掘調査区の長さ約120m、幅約15mで調査対象面積は1,700㎡である。調査区は段丘上の縁にあたり、標高は25～26mである。

調査区中央部のⅢNグリッドラインから南側は耕作による削平により、ほぼ平坦な地形になっており、遺物包含層が失われている状況であった。ⅢNグリッドラインから北側は小谷に向かっていく斜面となっている。ⅢUグリッドラインまでの間で遺構は検出されず、遺物の出土も少量であったためⅢUグリッドライン以北はトレンチでの調査を行った(図11)。

調査の結果、遺構は溝状土坑１基を検出した。遺物は土器、石器が出土した。土器は総重量1314.1ｇで、縄文時代早期・後期・晩期の土器が出土した。石器は剥片石器１点、礫石器４点が出土した。

（齋藤正）

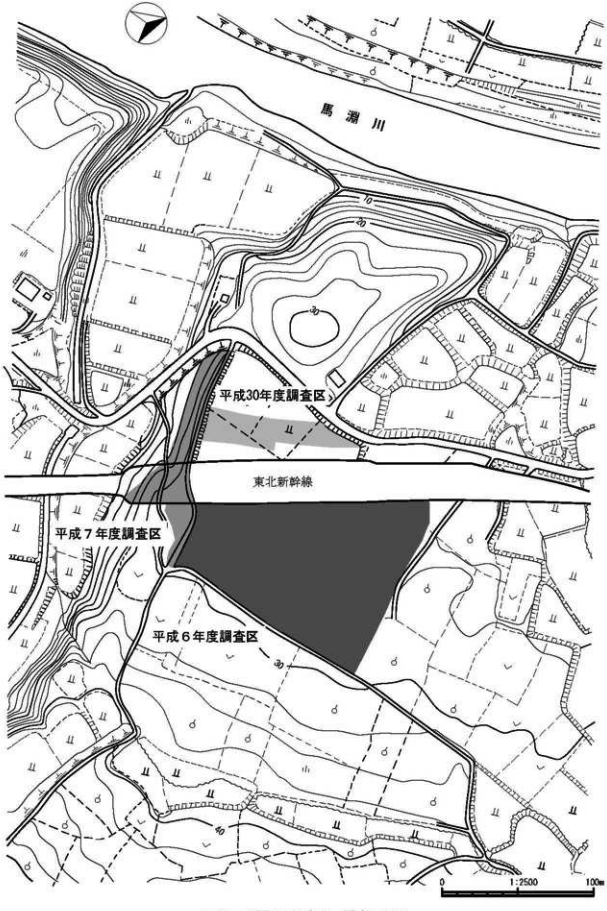


図10　西張（3）遺跡　調査区域図

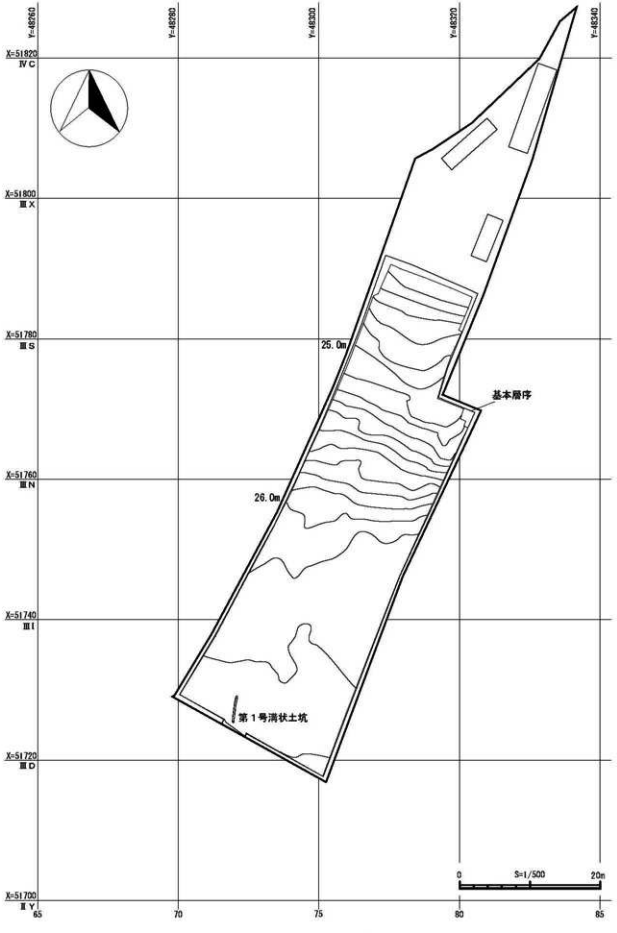


図 11　西張（3）遺跡　遺構配置図

第２節　基本層序

西張（３）遺跡の基本層序は、調査区の中央から南側が大規模に削平され、黒色土層が失われている状況であったため、調査区の中央部、ⅢP-80の一部を深く掘り、北壁の土層で確認した。小谷に向かって傾斜し始める部分である。第Ⅰ層から第Ⅹ層に分層した。各層の概要は以下の通りである。

第Ⅰ層は黒褐色土を主体とした現代の盛り土層である。にぶい黄褐色土や褐色土が帯状に堆積している。粒径20～40mmの黄褐色軽石や粒径１～５mmの白色軽石が全体に混入している。上位は乾燥しておりしまりは弱く、下位はしまりがある。

第Ⅱ層は黒色土層で灰白色の十和田ｂ軽石を全体に含む。しまりはややある。

第Ⅲ層は黒色土層で細粒の中撫軽石を多く含むが、密集している程ではない。下位層からの南部軽石も少量含まれる。

第Ⅳ層は黒色土層で南部軽石が含まれる。しまりはややある。

第Ⅴ層は黒色土層で粒径５～10mmの南部軽石が含まれ、中位から下位にかけて多量に含まれている。しまりは強い。

第Ⅵ層はにぶい黄褐色土層である。色調が下位にかけて暗褐色から褐色ないし、にぶい黄褐色へと変化する。粒径５～20mmの黄褐色軽石が上部に堆積している。地山である第Ⅶ層との漸移層である。

第Ⅶ層は黄褐色土層である。粒径10mm程度の白色軽石が少量含まれる。

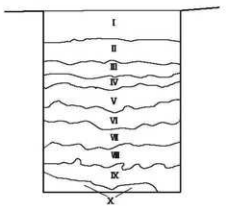
第Ⅷ層はにぶい黄色土層で粒径15～20mmの黄褐色軽石が含まれる。

第Ⅸ層はにぶい赤褐色土を主体として粒径５～10mmの黄褐色軽石が含まれる。

第Ⅹ層は軽石層で浅黄橙色の軽石が密集している。

出土遺物の多くが第Ⅰ・Ⅱ層から出土であるが、第Ⅳ・Ⅴ層から縄文時代早期の土器や三角柱状の磨石が出土している。

遺跡の地形については、平成８・９年度の調査報告書及び第１編第２章第４節において記述しているので、あらためて記述はしない。　（齋藤正）



基本層序

Ⅰ層	10YR3/2黒褐色土	φ１～５mm白色軽石20%
Ⅱ層	10YR2/1黒色土	十和田b軽石φ１～５mm５%
Ⅲ層	10YR1.7/1黒色土	中撫軽石φ１～２mm10%、南部軽石φ５～10mm３%
Ⅳ層	10YR2/1黒色土	南部軽石φ１～２mm７%
Ⅴ層	10YR2/1黒色土	南部軽石φ５～10mm50%
Ⅵ層	10YR3/3にぶい黄褐色土	黄褐色軽石φ５～20mm30%
Ⅶ層	10YR5/6黄褐色土	白色軽石φ３～10mm２%
Ⅷ層	2.5Y6/4にぶい黄色土	黄褐色軽石φ15～20mm10%
Ⅸ層	5YR5/4にぶい赤褐色土	黄褐色軽石φ５～10mm５%
Ⅹ層	10YR8/3浅黄橙色土	軽石層

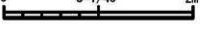


図12　西張（３）遺跡　基本層序

第２章　検出遺構と出土遺物

第１節　溝状土坑

第１号溝状土坑（SV01）（図13、写真図版２）

［位置・確認］文化財保護課の試掘調査で確認されていたもので、調査区南側にあたるⅢE・ⅢF-71・72グリッドに位置している。標高26mの地点で検出した。第Ⅹ層から検出したため、大規模な削平を受けており、遺構の上部は大きく欠失していた。

［平面形・規模］細い溝状を呈している。計測規模は開口部で長軸380cm、短軸26cm、底面で長軸350cm、短軸20cmである。検出面からの深さは16cmで、底面は両端部から中央に向かって傾斜している。長軸断面形は浅い皿形で、短軸断面形はU字状である。長軸方向はN-９°(E)-Sである。

［堆積土］暗褐色土の単層である。

［出土遺物］なし。

［小結］詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第２節　出土遺物

１　土器（図14、写真図版３）

縄文時代早期の土器（図14-１～３）

１は胴部片で、爪形状刺突文により区画された間に貝殻腹縁文が施されている。特徴から根井沼式である。２・３は胴部片で貝殻押引き文が施されている。特徴から吹切沢式と考えられる。

縄文時代後期の土器（図14-４～８）

４は口縁部片で沈線間に無節Lが充填されている。５は沈線間にLRが充填されている。６は５条１単位の沈線が施文されている。７は沈線が施文されている。８は胴部片で単軸絡条体第５類が施文されている。特徴から十腰内Ⅰ式である。

縄文時代晩期の土器（図14-９～12）

９～11は口縁部片で平口縁である。LRが回転施文されている。出土地点が近く、施文や色調が類似していることから同一個体の可能性がある。12は胴部片で縄文が回転施文されている。時期は晩期後葉と思われる。

時期不明の土器（図14-13）

13は底部片で平底である。無文であるため詳細な時期等は不明である。

２　石器（図15-１～５、写真図版３）

石匙（図15-１）

１点の出土である。１は縦長の剥片を使用し、背面全面を剥離調整が覆う。石質は珪質頁岩である。

打製石斧（図15-２）

１点の出土である。２は片面に原礫面が残る。石質は粗粒玄武岩である。

磨石（図15-３～５）

３点の出土である。３は１面を使用している。４、５は形状が三角柱状であり、側縁を使用している。

（齋藤正）

第１号溝状土坑

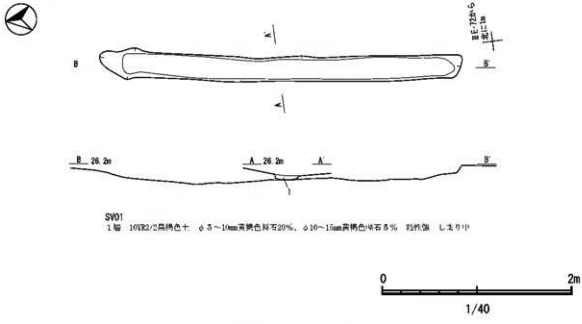


図13　西張（3）遺跡　溝状土坑

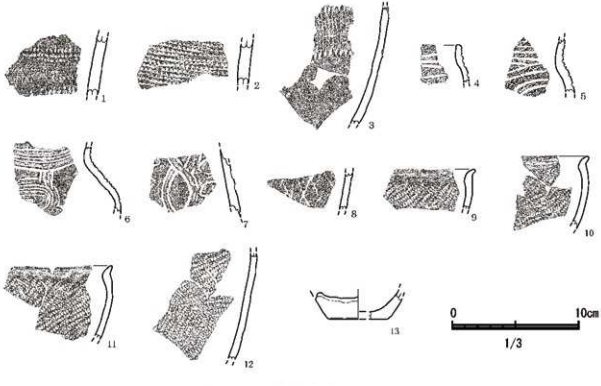


図14　西張（3）遺跡　出土土器

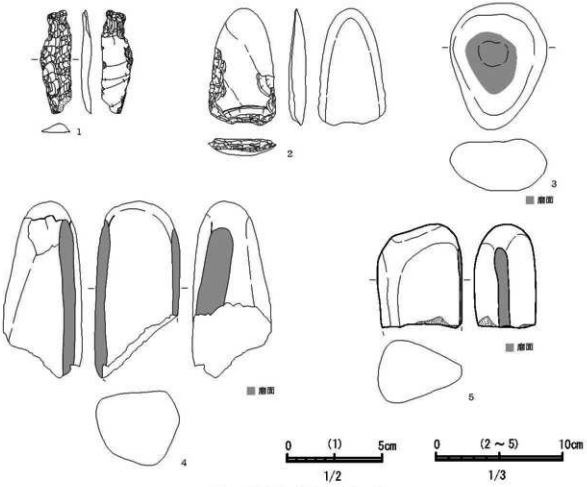


図15　西張（3）遺跡　出土石器

第３編　舘遺跡

第１章　調査の概要

第１節　調査区と遺構・遺物の概要

調査区は遺跡範囲の南東部分にあたり、県道櫛引上名久井三戸線に沿った長さ約135m、幅4.5～13mの範囲である。調査区の標高は約25～27mで、南東側が高く、北東側に向かって低くなる。北東側は県道よりも一段高くなっており、比高は最大で約2.5mを測る。調査区内は全体的に大きく削平されていたほか、ⅠG-17グリッドからⅠN-23グリッド付近では、50cm～1.5mほどの厚さの盛土がなされるなど、地形改変の痕跡が目立つ。

調査の結果、遺構は堀跡１条、溝跡１条、性格不明遺構１基、土坑８基、溝状土坑１基、ピット19基を検出した。堀跡以外の遺構は調査区北東側に集中している。遺物は縄文土器・石器・土製品・石製品が段ボール箱で59箱分出土した。地形改変の影響により遺物の大部分は原位置から移動している可能性が高いが、ⅠZ-41、ⅡA-38、ⅡC-42グリッド第Ⅰ層で出土量が多い。

第２節　基本層序

基本層序はⅡB-39グリッドの北西壁で確認した。各土層の特徴等は図16のとおりである。調査時は第Ⅰ層を３層に細分していたが、いずれの層も地形改変による層であると判断したため、第Ⅰ層に集約した。層番号の変更点を下表に記す。なお、遺物への注記は変更前の層番号でおこなわれている。

第Ⅱ・Ⅲ層は黄褐色軽石を多量に含む層である。軽石は十和田火山から噴出した十和田-南部火山灰(To-Nb)と推定される。遺構確認面は第Ⅲ層である。

変更前	変更後
第Ⅰ層	第Ⅰ層
第Ⅱ層	
第Ⅲ層	
第Ⅳ層	第Ⅱ層
第Ⅴ層	第Ⅲ層

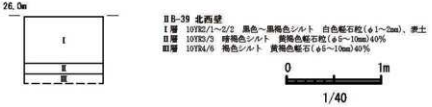


図 16　舘遺跡　基本層序

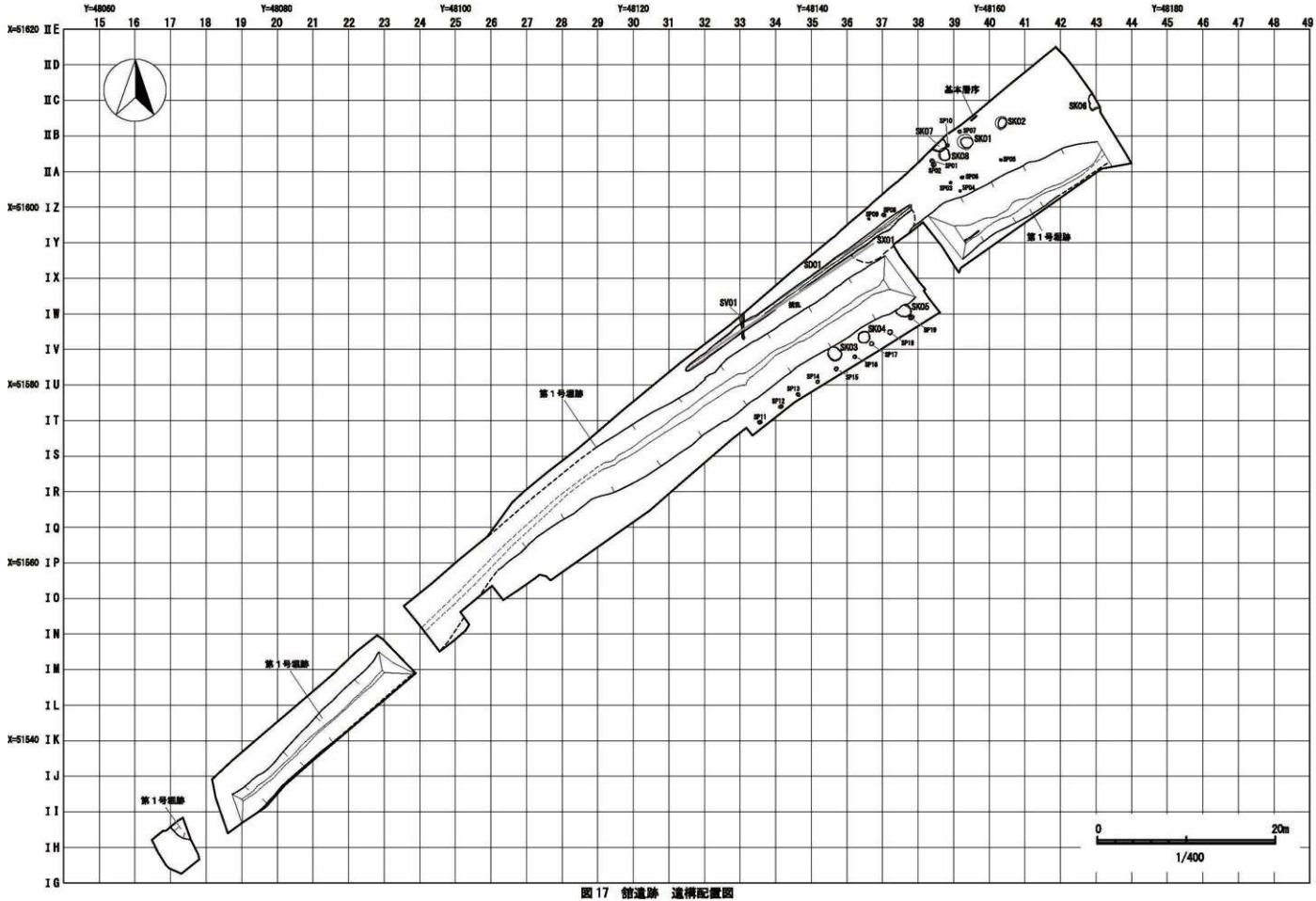


図 17　館遺跡　遺構配置図

第２章　検出遺構と出土遺物

整理時に下表のとおり遺構の名称変更をおこなった。

変更前	変更後
SD01	第１号堀跡
SD02	第１号溝跡(SD01)

第１節　堀跡

第１号堀跡（図18～21･25～27、写真図版４～８･12･13）

【位置･確認】ⅠH-17～ⅡA-43グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。作業の安全性を考慮して一部勾配をつけて掘削したため完掘できなかった箇所がある。また､C-C'ラインとD-D'ライン付近では、湧水の影響により完掘を断念した。これらの箇所は平面･断面図上では破線で示している。

【重複】第１号性格不明遺構と重複し、本遺構が古い。

【規模･形態】北東から南西にかけて延び、北東端は調査区外へ続く。南西端はⅠH-17グリッド付近で西へ屈曲し、調査区外へ続く。確認長130m、幅4.82～6.15m、確認面からの深さは最大で3.08mである。断面形はB-B'ライン付近では箱状を呈し、それ以外の部分では薬研状を呈する。底面付近まで掘削すると水が湧き出し、下層は水没するような状況であった。

【堆積土】６カ所で土層の観察をおこなった。いずれも最下層では水成堆積の痕跡がみられ、下層では壁面の崩落土であるロームの堆積が顕著である。中層以上では黒色土がレンズ状に堆積しており、自然堆積によるものと考えられる。B-B'ライン２層やC-C'ライン１･２層はロームブロックが多量に混じる黒褐色土やローム主体の層であり、人為堆積と推測される。F-F'･G-G'ラインの１層より上部は、東北新幹線建設時に削平され、その上に盛土が約1.5mの厚さでなされていた。なお、B-B'ラインにおいて採取した試料で、プラント･オパール分析をおこなった(第４編参照)。

【出土遺物】堆積土上層から縄文土器、石器、土製品が出土した。土器は大部分が縄文時代後期前葉に帰属するものだが、早期後葉～前期前葉のもの(図25-１･２)や、後期初頭のもの(図25-３)も少量混じる。図25-19･21は内外面に施文される鉢形土器である。石器は石鏃１点、石箆２点、微細な剥離痕のある剥片１点、ピエス･エスキーユ１点、剥片33点、石核３点、打製石斧１点、磨製石斧１点、敲石10点、磨石２点、凹石１点、石錘２点、剥離のある礫３点、擦痕のある礫１点、石皿２点、自然搬入礫３点が出土した。図29-６は頁岩製で、両側面に磨滅が観察できる横長剥片素材のものである。図29-５は、緑色片岩(アオトラ石)製である。いずれも埋没過程で混入したものと考えられる。

【小結】時期を決定し得る遺物は出土していないが、堀の形態や立地、周辺地域における城館の存在や伝承等を総合すると、構築時期は中世の可能性が高い。

第２節　溝跡

第１号溝跡(SD01)（図22･27、写真図版８･９･14）

【位置･確認】ⅠU-31～ⅠZ-37グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】第１号性格不明遺構・第１号溝状土坑と重複し、本遺構が新しい。

【規模・形態】第１号堀跡に並行して北東から南西にかけて延びる。長さ31.42m、幅66～ 92cm、確認面からの深さ21cmを測り、壁面は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】４層に分層した。

【出土遺物】堆積土中から縄文時代後期初頭から前葉の土器、二次加工剥片３点、微細な剥離痕のある剥片１点、ピエス・エスキーユ１点、剥片14点、石核３点、敲石４点、石錘２点、剥離のある礫１点、自然搬入礫１点が出土した。いずれも自然流入とみられる。

【小結】時期を決定し得る遺物は出土していないが、第１号性格不明遺構との重複関係から、構築時期は中世以降である可能性が高い。

第３節　性格不明遺構

第１号性格不明遺構(SX01)（図 22、写真図版９）

【位置・確認】ⅠX-36～ⅠY-37グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】第１号堀跡と重複し、本遺構が新しい。第１号溝跡と重複し、本遺構が古い。

【規模・形態】ⅠY-37グリッドでは緩やかな窪みとなるが、ⅠX-36グリッド以南、ⅠX-37グリッド以東では輪郭が判然としなくなる。

【堆積土】10層に分層した(図22-９～18層)。15層は第１号堀跡を覆う。９～13･15層は黒色土に粒径の大きいロームブロックが多量に混じる。地山由来のロームブロックを多量に含むことから、第１号溝跡の掘り上げ土が窪地に堆積したものである可能性もあるが、断定はできない。

【出土遺物】堆積土中から縄文時代後期前葉の土器、石器が出土したが、混入の可能性が高い。

【小結】時期を決定し得る遺物は出土していないが、第１号堀跡や第１号溝跡との重複関係から構築時期は第１号堀跡が埋没した後であり、中世以降である可能性が高い。

第４節　土坑

第１号土坑(SK01)（図23、写真図版９）

【位置・確認】ⅡA-39グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】なし。

【規模・形態】開口部の長軸1.32m、短軸1.17m、底面の長軸1.72m、短軸1.63mの楕円形を呈し、確認面からの深さは48cmである。断面形はフラスコ状を呈し、底面はほぼ平坦である。

【堆積土】５層に分層した。５層にはロームブロックが混じることから、壁面の崩落土と推定される。

【出土遺物】堆積土中から掻器が１点出土した。

【小結】時期を特定し得る遺物が出土していないことから詳細時期は不明だが、類似した形態をもつ他の土坑と同様に縄文時代後期前葉以前に帰属すると考えられる。

第２号土坑(SK02)（図23･28、写真図版９）

【位置・確認】ⅡB-40グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】なし。

【規模・形態】開口部の長軸1.13m、短軸86cm、底面の長軸1.48m、短軸1.2mの楕円形を呈し、確認面からの深さは46cmである。断面形はフラスコ状を呈し、底面はほぼ平坦である。
【堆積土】７層に分層した。５～７層にはロームブロックが混じることから､壁面の崩落土と推定される。
【出土遺物】１層から縄文時代後期前葉の土器片が１点出土した。
【小結】出土遺物から、縄文時代後期前葉以前の土坑と考えられる。

第３号土坑(SK03)（図23･28、写真図版10）
【位置・確認】ⅠU-35、ⅠV-35グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。
【重複】第１号堀跡と重複し、本遺構が古い。
【規模・形態】長軸1.56m、短軸1.30mの楕円形を呈する。確認面からの深さは42cmである。断面形はフラスコ状を呈し、底面はほぼ平坦である。
【堆積土】８層に分層した。
【出土遺物】堆積土中から縄文時代後期前葉の土器３点、石鏃(破片)１点、剥片１点が出土し、うち土器１点を図示した。図28-２は鉢形土器の底部である。
【小結】出土遺物から、縄文時代後期前葉以前の土坑と考えられる。

第４号土坑(SK04)（図23･28、写真図版10･14）
【位置・確認】ⅠV-36グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。
【重複】なし。
【規模・形態】開口部の直径1.39m､底面の直径1.19mの円形を呈する。確認面からの深さは25cmである。壁面は直線的に立ち上がり、底面は平坦である。
【堆積土】２層に分層した。
【出土遺物】堆積土中から縄文土器片３点が出土し、うち１点を図示した。図28-３は胎土に繊維を含んでおり、結束第１種羽状縄文が施される。縄文時代前期前葉に帰属すると考えられる。
【小結】出土遺物から、縄文時代前期前葉以前の土坑と考えられる。

第５号土坑(SK05)（図24･28、写真図版10）
【位置・確認】ⅠV-37、ⅠW-37グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。
【重複】第１号堀跡と重複し、本遺構が古い。
【規模・形態】長軸は残存する範囲で1.33m、短軸1.41mを測り、楕円形を呈する。確認面からの深さは34cmである。壁面は緩やかに立ち上がる。
【堆積土】２層に分層した。
【出土遺物】堆積土中から縄文土器片が２点出土した。縄文時代後期前葉に帰属すると考えられる。
【小結】出土遺物から、縄文時代後期前葉以前の土坑と考えられる。

第６号土坑(SK06)（図24･28、写真図版10･14）
【位置・確認】ⅡB-42･43、ⅡC-42グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】なし。

【規模・形態】北東側は調査区外へ延びる。長軸1.65m、短軸は残存する範囲で1.30mを測り、不整楕円形を呈する。確認面からの深さは18cmであり、壁面は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】１層に分層した。

【出土遺物】検出面から縄文時代後期前葉の土器１点、１層から縄文時代後期前葉の土器、土器片利用土製品１点、石鏃１点、二次加工剥片２点、剥片15点、敲石１点が出土した。図28-６・11は深鉢形土器である。６の口縁部は緩やかな波状となる。胴部は平行沈線による区画の中に方形文が施文され、沈線間に櫛歯状沈線が充填される。底部には網代痕が認められる。また、胴下端部外面にはススが帯状に付着しており、その上位10cmほどの範囲は被熱により器面が劣化している。11は検出面において倒立の状態で出土した。胴部に三角形文が施され、L縄文が充填される。石鏃(図29-13)は先端部から衝撃剥離痕が確認できる。二次加工剥片(図29-14)は珪質頁岩製で削器の可能性がある。縦6.1cm、横8.3cm、重量60.7gで、本遺跡の珪質頁岩製の石器としては最大級の大きさである。

【小結】出土遺物から、縄文時代後期前葉に帰属すると考えられる。

第７号土坑(SK07)（図24・28、写真図版11・14）

【位置・確認】ⅡA-38グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】第８号土坑と重複し、本遺構が新しい。第10号ピットと重複し、本遺構が古い。

【規模・形態】北西側は調査区外へ延びる。長軸は残存する範囲で94cm、短軸は1.63mを測り、不整楕円形を呈する。確認面からの深さは45cmである。壁面は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】３層に分層した。

【出土遺物】堆積土中から縄文時代後期前葉の土器、二次加工剥片１点、敲石２点、石錘１点が出土し、うち土器７点を図示した。図28-12は深鉢形土器口縁部で、隆沈線によって弧状文が表出される。図28-18は小型の浅鉢形土器である。沈線によって２段に区画された中に弧状文や縦位の波状入組文が施される。

【小結】出土遺物から、縄文時代後期前葉以前の土坑と考えられる。

第８号土坑(SK08)（図24、写真図版11）

【位置・確認】ⅡA-38グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】第７号土坑と重複し、本遺構が古い。

【規模・形態】開口部の長軸は残存する範囲で1.16m、短軸1.09m、底面の長軸1.45m、短軸1.28mを測り、楕円形を呈する。確認面からの深さは60cmである。断面形はフラスコ状を呈する。

【堆積土】７層に分層した。いずれの層にも地山由来のロームブロックが多量に混じることから、人為堆積と考えられる。

【出土遺物】なし。

【小結】重複関係から、縄文時代後期前葉以前の土坑と考えられる。

第５節　溝状土坑

第１号溝状土坑(SV01)（図24、写真図版11）

【位置・確認】Ⅰ V-33グリッドに位置する。第Ⅲ層で確認した。

【重複】第１号溝跡と重複し、本遺構が古い。

【規模・形態】北側は調査区外へ延びる。開口部の長軸は残存する範囲で2.51m、短軸64cm、底面の長軸は残存する範囲で2.71m、短軸９cmを測り、確認面からの深さは1.23mである。長軸方向の壁はオーバーハングして立ち上がる。

【堆積土】９層に分層した。５層は地山由来の褐色土であり、壁面の崩落土と推測される。

【出土遺物】なし。

【小結】時期を特定し得る遺物は出土しなかったが、形態から縄文時代の落とし穴と考えられる。

第６節　ピット

ピットは19基検出した(図17)。表２に詳細をまとめた。第11～19号ピットは第１号堀跡に並行して北東から南西方向に並んでいるが、柱痕や遺物は検出されておらず、詳細は不明である。ピットの中心間の距離は、SP11・12間とSP18・19間が約2.8m、その他は約2.3mである。

表２　ピット計測表

遺構名	グリッド	平面形	長軸	短軸	深さ	柱痕跡	重複	出土遺物
SP01	ⅡA-38	円形	0.43	0.40	0.32	×		
SP02	ⅡA-38	楕円形	0.53	0.44	0.32	×		
SP03	ⅠZ-38	円形	0.31	0.27	0.35	×		
SP04	ⅠZ-39	円形	0.27	0.25	0.28	×		
SP05	ⅠA-40	楕円形	0.34	0.28	0.35	×		縄文土器
SP06	ⅠZ-39	不整楕円形	0.48	0.30	0.71	×		
SP07	ⅡB-39	円形	0.36	0.36	0.55	×		
SP08	ⅠY-37	楕円形	0.44	0.39	0.43	×		
SP09	ⅠY-36	楕円形	0.28	0.24	0.36	×		
SP10	ⅡA-38	楕円形	0.38	0.32	0.72	×	>SK07	縄文土器
SP11	ⅠS-33	楕円形	0.46	0.38	0.27	×		
SP12	ⅠT-34	楕円形	0.52	0.38	0.55	×		
SP13	ⅠT-34	楕円形	0.45	0.35	0.34	×		
SP14	ⅠU-35	円形	0.37	0.37	0.38	×		
SP15	ⅠU-35	楕円形	0.46	0.38	0.44	×		
SP16	ⅠU-36	円形	0.41	0.39	0.50	×		
SP17	ⅠV-36	円形	0.45	0.45	0.54	×		
SP18	ⅠV-37	円形	0.56	0.55	0.56	×		
SP19	ⅠV-37	楕円形	0.59	0.49	0.53	×		

（単位：m）

（木村）

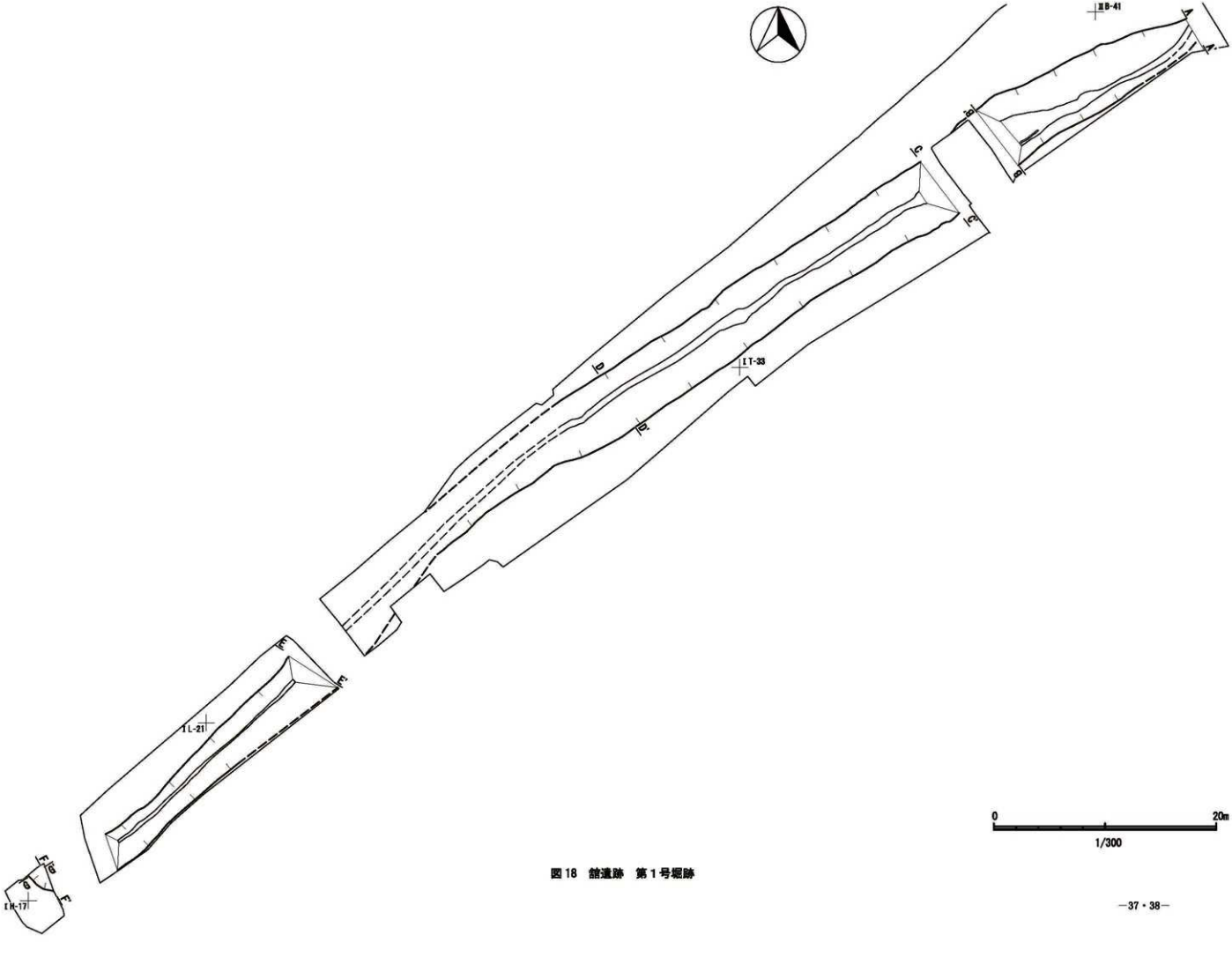
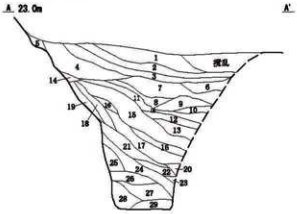


図 18　館遺跡　第 1 号堀跡

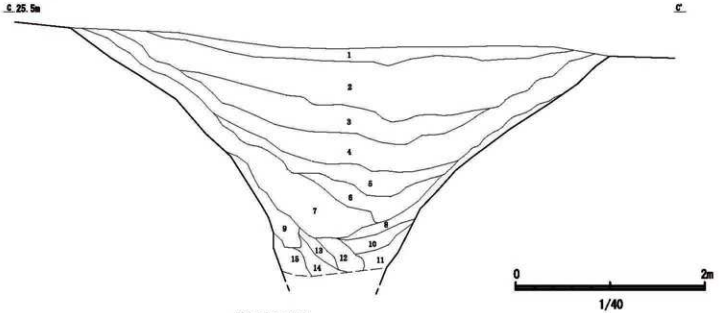
第１号堀跡 A-A'



第１号堀跡 A-A'

1層　10YR2/1　黒色土　シルト質、礫石1%
2層　10YR2/2　黒褐色土　シルト～砂質土、礫石1%
3層　10YR3/1　黒褐色土　シルト～砂質土、2層より砂の量が多くなる、礫石2%、灰白土ブロック1%
4層　10YR3/1　黒褐色土　シルト質土層、礫石主体の土と砂主体の土と互層となる
5層　10YR2/1　灰白色土40%　10YR6/8黄褐色土ブロック40%、10YR2/1黒色土20%と入り交じる、灰白色土は壁面からの崩落か
6層　10YR2/2　黒褐色土　シルト質、礫石2%
7層　10YR4/4　褐色土　細砂～粗砂質、礫石3%
8層　10YR6/4　にぶい黄褐色土　粗砂及び礫石を主体とする層、10YR2/2黒褐色土ブロック10%、流水の影響での堆積か
9層　10YR2/1　黒色土　6層と同質の土のブロック（φ60mm）5%
10層　10YR6/4　にぶい黄褐色土　上半部が灰白色土30%と下半部より多く、下半部は土色がより濃く10YR5/3褐砂及び礫石が1%と上半部より多い
11層　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック（φ50～80mm）30%
12層　10YR4/4　褐色土　細砂～粗砂・礫石（φ1～2mm）、砂・礫石は流水の影響か
13層　10YR4/4　褐色土　細砂～粗砂・礫石（φ1～8mm）、砂・礫石は流水の影響か
14層　10YR4/4　褐色土　10YR2/1黒色土ブロック（φ50mm）30%
15層　10YR4/6　褐色土　シルト質、礫石10%
16層　10YR3/3　暗褐色土　礫石30%、灰白色土粒（φ5～20mm）10%
17層　10YR4/6　褐色土　全体としてシルト質だが細砂～粗砂を含む、15層と同質のブロック（φ50～100mm）20%
18層　10YR4/6　褐色土　10YR2/1灰白色土ブロック80%、礫石10%が低斜に沿って斜めに堆積
19層　10YR2/1　黒色土　10YR6/1灰白色土ブロック20%斜めに堆積
20層　10YR4/4　褐色土　細砂～粗砂と礫石が互層となる
21層　10YR6/2　灰白色土　少し汚れた灰白色土層と礫（φ30mm の10YR3/1黒褐色土が互層となる
22層　10YR3/1　黒褐色土　細砂～粗砂層と礫石層が互層となる
23層　10YR5/3　にぶい黄褐色土　上2/3は細砂質、下1/3は粗砂質
24層　2.5Y6/3　黄褐色土　灰白色土ブロック（φ5～80mm）30%、礫石20%、ローム粒（φ5～20mm）10%
25層　10YR4/2　灰黄褐色土　礫石層、細～粗砂層が互層となる
26層　2.5Y6/3　黄褐色土　粗砂層、灰白色土30%、10YR3/1黒褐色土10%
27層　2.5Y4/3　オリーブ褐色土　10YR4/6褐色土ブロック（φ50～200mm）60%、礫石20%
28層　2.5Y7/3　浅黄色土　礫石を主体とし細～粗砂が混じる、ロームブロック（φ50mm）10%、礫（φ50～150mm）40%
29層　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　砂質土、礫石20%、礫（φ30～150mm）40%

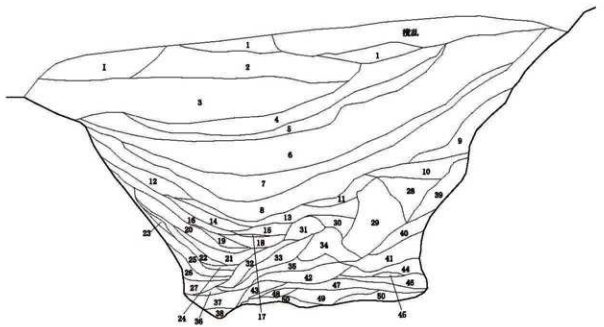
第１号堀跡 C-C'



第１号堀跡 C-C'

1層　10YR5/8　黄褐色土　10YR2/2黒褐色土10%
2層　10YR3/2　黒褐色土　10YR6/8黄褐色土20%、礫石（φ～10mm）15%
3層　10YR2/1　黒色土　10YR5/8黄褐色土5%
4層　10YR3/2　黒褐色土　10YR6/8黄褐色土5%、礫石（φ～10mm）10%
5層　10YR3/2　黒褐色土　5YR3/3浅黄色土10%、10YR5/8黄褐色土3%
6層　10YR3/1　黒褐色土　10YR4/6褐色土5%、礫石（φ～10mm）3%
7層　10YR3/2　黒褐色土　礫石（φ～10mm）3%
8層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR4/6褐色土10%、5YR3/3浅黄色土5%、礫石（φ～10mm）5%
9層　10YR3/2　黒褐色土　10YR4/6褐色土5%、10YR2/1黒色土3%、礫石（φ～10mm）3%
10層　10YR3/2　黒褐色土　10YR4/6褐色土5%、5YR3/3浅黄色土5%
11層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR2/4にぶい黄褐色土3%
12層　10YR3/2　黒褐色土　10YR2/4にぶい黄褐色土3%
13層　10YR3/2　黒褐色土　10YR4/4褐色土5%
14層　10YR3/2　黒褐色土　5YR/3浅黄色土5%
15層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　10YR3/3暗褐色土5%

第１号堀跡 B-B'

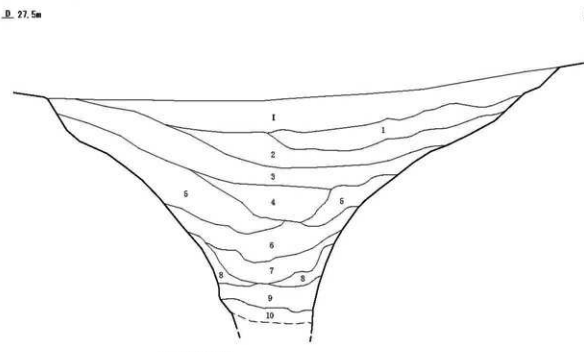


第１号堀跡 B-B'

1層　10YR2/1　黒色土　礫石1%
2層　10YR2/1　黒色土　1層とともに非成土の可能性があるが炭かともしまりあり
3層　10YR2/1　黒色土　ロームブロック（φ20～200mm）40%均等に入る、時期不明の盛成土
4層　10YR2/1　黒色土　シルト質だが細砂～粗砂が多く混じる
5層　10YR2/2　黒褐色土　シルト質だが細砂～粗砂が混じる
6層　10YR2/1　黒色土　シルト質だが細砂～粗砂が混じる
7層　10YR1.7/1　黒色土　シルト質だが細砂～粗砂が混じる、礫石0.5%
8層　10YR3/2　黒褐色土　シルト質、細砂～粗砂ブロック（φ60mm）2%、礫石2%
9層　10YR3/3　黒褐色土　シルト質、ロームブロック20%、灰白色土ブロック10%
10層　10YR2/1　黒色土　シルト質、10YR3/3黒褐色土ブロック20%
11層　10YR3/3　黒褐色土　シルト質、礫石3%
12層　10YR3/3　暗褐色土　シルト質、ロームブロック10%
13層　10YR3/3　暗褐色土　シルト質、灰白土ブロック（φ5～20mm）10%、10YR2/3黒褐色土ブロック10%
14層　10YR3/3　暗褐色土　灰化物1%、ロームブロック（φ5～10mm）10%
15層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　細砂・粗砂・礫石が幅5～30mmで互層をなす
16層　10YR4/2　灰黄褐色土　シルト質、礫石1%
17層　10YR4/4　褐色土　細～粗砂・礫石からなる水平地盤層、水流の痕跡
18層　10YR2/2　黒褐色土　ロームブロック（φ5～80mm）6%、灰白色土ブロック（φ5～50mm）5%
19層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　細～粗砂質、10YR2/1黒色土ブロック（φ5～50mm）10%、灰白色土ブロック（φ5～10mm）5%
20層　10YR4/4　褐色土　シルト質、細～粗砂混入
21層　10YR4/2　灰黄褐色土　灰白色土ブロック（φ5～50mm）5%、礫石1%
22層　10YR4/2　灰黄褐色土　灰白色土ブロック（φ5～30mm）20%、10YR2/1黒色土ブロック（φ50mm）5%
23層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　灰白色土ブロック（φ5～30mm）2%
24層　10YR6/8　明黄褐色土　灰白色土ブロック（φ5～30mm）10%
25層　10YR8/1　灰白色土　10YR2/1黒色土ブロック（φ5～30mm）3%、26層に接する最下部に幅5～30mmの10YR4/3にぶい黄褐色土が入る
26層　10YR8/1　灰白色土　上方からの崩落土
27層　2.5Y5/2　暗灰黄褐色土　幅5～20mmの灰白色土・礫石・細～粗砂質土が互層となる
28層　10YR2/1　黒色土　シルト質、ロームブロック（φ4～20mm）20%、礫石2%
29層　10YR5/6　黄褐色土　大型ロームブロック主体、上側縁辺部に10YR4/3にぶい褐色土ブロックと礫石が混じる
30層　10YR2/1　黒色土　シルト質、10YR3/3暗褐色土ブロック20%
31層　10YR4/6　褐色土　シルト質、礫石3%
32層　10YR2/1　黒色土　ロームブロック（φ5～50mm）10%、灰白色土ブロック（φ5～100mm）10%
33層　10YR5/6　黄褐色土　灰白色土ブロック（φ5～30mm）30%
34層　10YR8/1　灰白色土　10YR7/4にぶい黄橙色土ブロック（φ300mm）30%
35層　10YR6/3　にぶい黄褐色土　灰白色土ブロック（φ5～50mm）5%、10YR2/1黒色土ブロック（φ5～40mm）3%
36層　2.5Y5/2　暗灰黄褐色土　細～粗砂質、10YR3/1黒褐色土ブロック（φ30mm）10%、10YR1.7/1黒色土ブロック（φ30mm）5%
37層　10YR5/2　灰黄褐色土　粗砂・礫石からなる層と細砂層が互層となる
38層　10YR4/4　褐色土　粗砂・礫石からなる層、礫（φ5～100mm）30%
39層　10YR8/1　灰白色土
40層　10YR1.7/1　黒色土　10YR8/1灰白色土ブロック40%
41層　10YR8/1　灰白色土　ロームブロック（φ5～20mm）と互層となる
42層　2.5Y7/2　灰黄色土　細～粗砂質、灰白色土ブロック（φ5～150mm）10%、10YR2/1黒色土ブロック（φ5～50mm）5%、礫5～10mmの10YR1.7/1黒色土が中央に入る
43層　2.5Y5/4　黄褐色土　粗砂質、下部に10YR2/1黒色土ブロック（φ30～100mm）、灰白色土ブロック（φ5～10mm）5%
44層　10YR1.7/1　黒色土　シルト質、礫石1%、ロームブロック（φ5～20mm）5%
45層　10YR3/4　暗褐色土　シルト質、灰白色土ブロック（φ5～20mm）3%
46層　10YR4/6　褐色土　粗砂質、ロームブロック10%　灰白色土ブロック3%
47層　2.5Y4/3　オリーブ褐色土　ロームブロック（φ30～50mm）10%、灰白色土ブロック（φ5～30mm）5%、10YR1.7/1黒色土ブロック5%
48層　10YR3/2　黒褐色土　灰白色土ブロック（φ5～30mm）5%、ロームブロック（φ5～10mm）30%
49層　10YR5/2　灰黄褐色土　礫（φ5～10mm）30%
50層　10YR7/3　にぶい黄橙色土　粗砂・礫石からなる層、10YR2/2黒褐色土ブロック5%

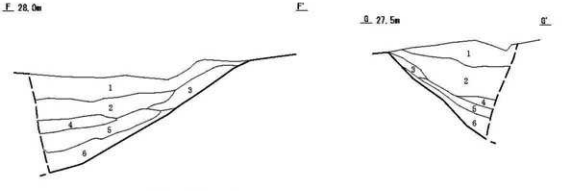
図 19　館遺跡　第１号堀跡土層（A-A'～C-C'）

第１号堀跡 D-D'



第１号堀跡 D-D'
Ⅰ層　10YR3/1　黒褐色土　10YR3/4緑褐色±5%
1層　10YR3/2　黒褐色土　10YR5/4にぶい褐色土10%
2層　10YR2/2　黒褐色土　10YR4/6褐色±5%
3層　10YR2/2　黒褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色±5%、軽石(φ～10mm)3%
4層　10YR3/2　黒褐色土　10YR3/3緑褐色±5%
5層　10YR3/3　暗褐色土　10YR2/2黒褐色±5%、10YR4/4褐色±5%
6層　10YR2/2　黒褐色土　10YR4/3にぶい黄褐色±5%
7層　10YR4/4　褐色土　10YR5/1黒褐色±5%、軽石(φ～5mm)3%
8層　10YR8/1　灰白色土　10YR2/1黒褐色±5%
9層　10YR4/2　灰黄褐色土　10YR4/1褐灰色±10%、砂5%
10層　7.5Y4/1　灰色土　10YR2/2黒褐色±10%、10YR4/4褐色±5%

第１号堀跡 F-F' ・G-G'

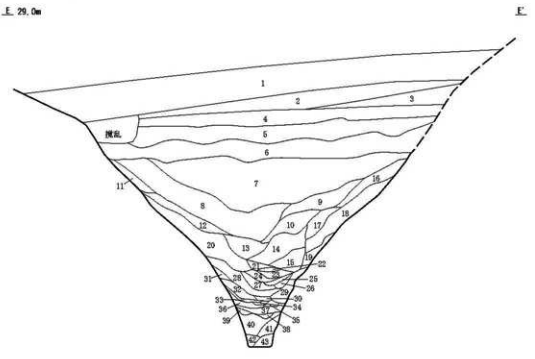


第１号堀跡 F-F' ・G-G'
1層　10YR2/1　黒色土　10YR4/4褐色±1%、軽石(φ～10mm)5%
2層　10YR2/2　黒褐色土　砂10%、軽石(φ～10mm)5%
3層　10YR2/1　黒色土　軽石(φ～10mm)3%
4層　10YR3/1　黒褐色土　10YR4/4褐色±1%、砂5%
5層　10YR3/1　黒褐色土　10YR4/4褐色±3%、砂10%
6層　10YR2/1　黒色土　10YR4/4褐色±5%、砂3%

0　2m
1/40

図20　舘遺跡　第1号堀跡土層(D-D'・F-F'・G-G')

第１号堀跡 E-E'



第１号堀跡 E-E'

1層　10YR7/2　にぶい黄橙色砂質シルト、現代の盛土層
2層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）10%、現代の盛土層
3層　10YR5/8　黄褐色粘土　白色軽石粒（φ5～10mm）3%、10YR2/2黒褐色土ブロック30%、現代の盛土層
4層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）5%
5層　10YR3/1　黒褐色シルト　黄褐色軽石粒（φ5～10mm）10%、10YR5/4暗褐色土ブロック5%
6層　10YR3/1　黒褐色砂　黄褐色軽石粒（φ5～10mm）2%、以下、地層土
7層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ5～10mm）2%
8層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）3%
9層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）10%
10層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）1%
11層　10YR2/1　黒色シルト　ロームブロック7%
12層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石粒（φ5～10mm）2%、ロームブロック20%
13層　10YR2/2　黒褐色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）10%、10YR2/1黒色シルト10%
14層　10YR2/2　黒褐色砂質シルト　ロームブロック5%、10YR2/1黒色シルト15%、10YR5/3にぶい黄褐色砂を30%
15層　10YR2/1　黒色シルト　ロームブロックを5%、10YR4/1N黒色土ブロック1%
16層　10YR3/2　黒褐色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）1%、10YR4/3にぶい黄褐色シルト5%
17層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）2%、10YR4/3にぶい黄褐色シルト30%
18層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）10%、ロームブロックを5%、10YR3/4暗褐色砂質シルトを30%含む、地山の崩落土
19層　10YR4/2　灰黄褐色砂　10YR6/3にぶい黄橙色粗砂と細砂が互層をなす
20層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）5%、10YR3/3暗褐色シルト40%
21層　10YR4/2　灰黄褐色砂　粗砂と細砂が互層をなす
22層　10YR2/1　黒色シルト　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト40%
23層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）3%、10YR4/3にぶい黄褐色シルト20%、10YR5/3にぶい黄褐色砂30%
24層　10YR2/1　黒色砂質シルト　10YR4/6褐色シルト2%
25層　10YR3/1　黒褐色シルト　10YR4/4褐色砂40%
26層　10YR3/1　黒褐色シルト　ロームブロック50%
27層　10YR3/1　黒褐色砂質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）5%、10YR4/4褐色シルト20%
28層　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）5%、10YR2/1黒色砂質シルト40%
29層　10YR3/4　暗褐色粘土質シルト　黄褐色軽石粒（φ2～5mm）3%、10YR2/1黒色砂を20%、ロームブロック10%
30層　10YR4/4　褐色砂　10YR2/1黒色シルトと10YR7/2にぶい黄橙色砂を層状に含む
31層　10YR2/1　黒色砂質シルト　10YR3/3暗褐色シルト30%
32層　10YR2/1　黒色砂質シルト　10YR4/4褐色シルト20%、ロームブロック1%
33層　2.5YR/4　にぶい黄色シルト
34層　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　10YR7/3にぶい黄橙色砂15%
35層　10YR7/3　にぶい黄橙砂　10YR3/1黒色砂を30%、10YR4/4褐色砂30%
36層　10YR3/4　暗褐色砂質シルト　10YR7/2にぶい黄橙色シルト10%、10YR2/1黒色粘土3%
37層　10YR3/2　黒褐色砂　10YR4/4褐色砂、10YR7/3にぶい黄橙色砂が混じる10YR2/1黒色粘土3%、ロームブロック10%
38層　10YR2/2　黒褐色粘土　10YR7/3にぶい黄橙砂30%、ロームブロック3%
39層　10YR4/2　灰黄褐色砂　ロームブロック10%
40層　10YR5/4　にぶい黄褐色砂　ロームブロック3%
41層　10YR2/1　黒色粘土　10YR5/4暗褐色粘土を30%
42層　10YR2/1　黒色粘土　ロームブロック40%
43層　2.5YR/1　灰白色シルト　10YR2/1黒色粘土40%

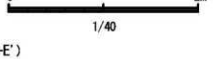


図 21　館遺跡　第１号堀跡土層（E-E'）

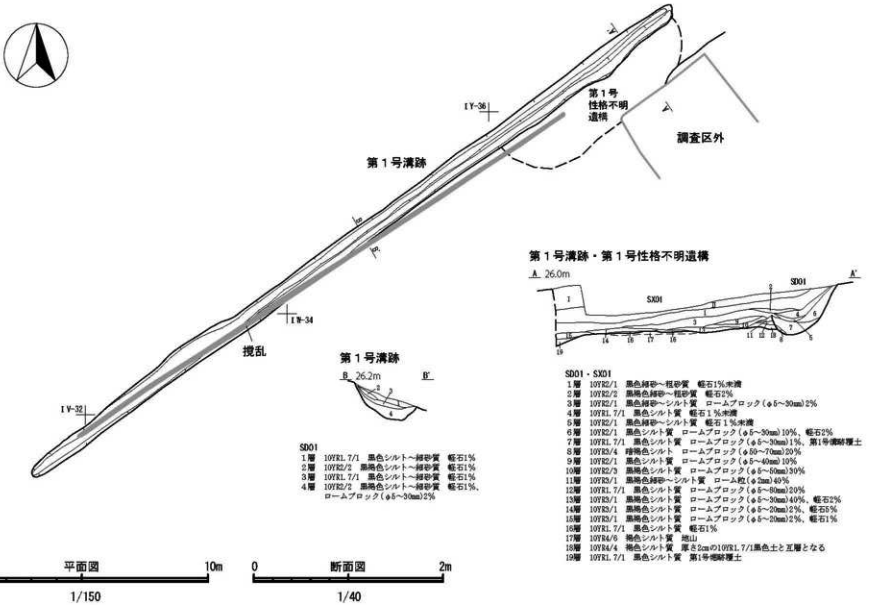
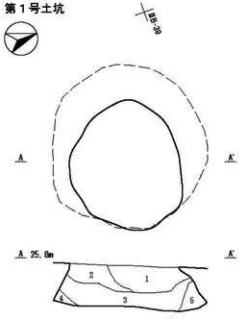


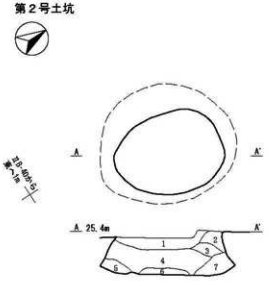
図 22　舘遺跡　第1号溝跡・第1号性格不明遺構

第１号土坑



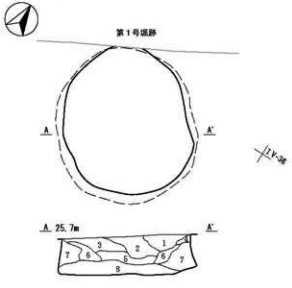
SK01
1層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）10%、白色軽石（φ1～2mm）10%
2層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）15%、白色軽石（φ1～2mm）10%、10YR2/2黒褐色土ブロック10%
3層　10YR2/2　黒褐色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）15%
4層　10YR2/2　黒褐色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）5%、10YR3/3　暗褐色土ブロック20%
5層　10YR2/2　黒褐色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）5%、地山ブロック30%

第２号土坑



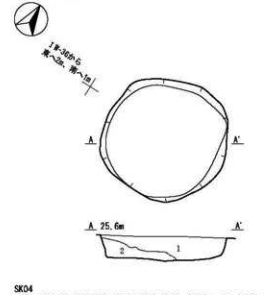
SK02
1層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）2%、白色軽石（φ1～2mm）20%
2層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）5%、白色軽石（φ1～2mm）10%、地山ブロック5%
3層　10YR2/1　黒色砂質シルト　白色軽石（φ1～2mm）5%
4層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）10%
5層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）2%、地山ブロック30%
6層　10YR2/1　黒色砂質シルト　黄褐色軽石（φ2～6mm）10%、地山ブロック20%
7層　10YR2/1　黒色砂質シルト　地山ブロック10%

第３号土坑



SK03
1層　10YR2/1　黒色土　10YR4/4褐色土5%、軽石（φ～1cm）5%
2層　10YR4/4　褐色土　10YR2/2黒褐色土10%、軽石（φ～1cm）5%
3層　10YR2/1　黒色土　10YR4/4褐色土5%、軽石（φ～1cm）5%
4層　10YR4/4　褐色土　10YR2/1黒色土5%、軽石（φ～5mm）3%
5層　10YR3/2　黒褐色土　10YR2/2黒褐色土5%、軽石（φ～5mm）5%
6層　10YR3/2　黒褐色土　軽石（φ～5mm）10%
7層　10YR4/4　褐色土　10YR2/2黒褐色土5%、軽石（φ～5mm）5%
8層　10YR3/3　暗褐色土　10YR2/2黒褐色土10%、軽石（φ～5mm）5%

第４号土坑

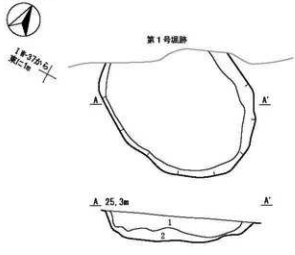


SK04
1層　10YR2/2　黒褐色土　10YR4/4褐色土5%、軽石（φ～10mm）20%
2層　10YR2/1　黒色土　軽石（φ～6mm）5%

0　2m
1/40

図 23　舘遺跡　第1～4号土坑

第５号土坑

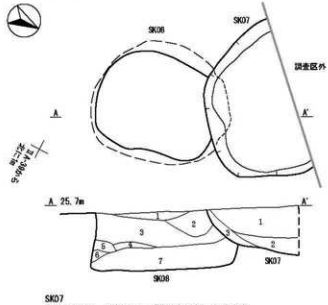


SK05
1層　10YR4/4　褐色土　10YR3/2黒褐色土5%、軽石(φ～10mm)10%
2層　10YR2/2　黒褐色土　軽石(φ～5mm)5%

第６号土坑

SK06
1層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)5%

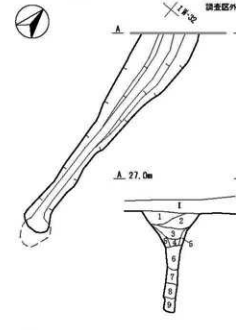
第７・８号土坑



SK07
1層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石(φ～1mm)20%、
　　黄褐色軽石(φ2～5mm)5%
2層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)10%
3層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)10%、
　　地山ブロック5%

SK08
1層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)10%、
　　地山ブロック(φ1～3cm)20%
2層　10YR2/3　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)10%、
　　地山ブロック(φ3～6cm)10%
3層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)10%、
　　地山ブロック(φ3～6cm)30%
4層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)2%、
　　地山ブロック(φ3～6cm)5%
5層　10YR2/1　黒色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)15%
6層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)2%
7層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色軽石(φ2～5mm)10%、
　　地山ブロック(φ3～7cm)40%

第１号溝状土坑



SV01
1層　10YR2/1　黒色土　10YR4/4褐色土5%、軽石(φ～6mm)10%
2層　10YR1.7/1　黒色土　軽石(φ～5mm)10%
3層　10YR2/2　黒褐色土　軽石(φ～5mm)5%
4層　10YR3/3　暗褐色土　軽石(φ～5mm)5%
5層　10YR4/4　褐色土　軽石(φ～5mm)1%、
6層　10YR3/1　黒褐色土　10YR2/1黒色土1%、軽石(φ～5mm)5%
7層　10YR2/1　黒色土　軽石(φ～5mm)5%
8層　10YR2/2　黒褐色土　軽石(φ～5mm)5%
9層　10YR2/2　黒褐色土　10YR4/4褐色土5%

0　2m
1/40

図 24　舘遺跡　第５～８号土坑・第１号溝状土坑

第１号堀跡

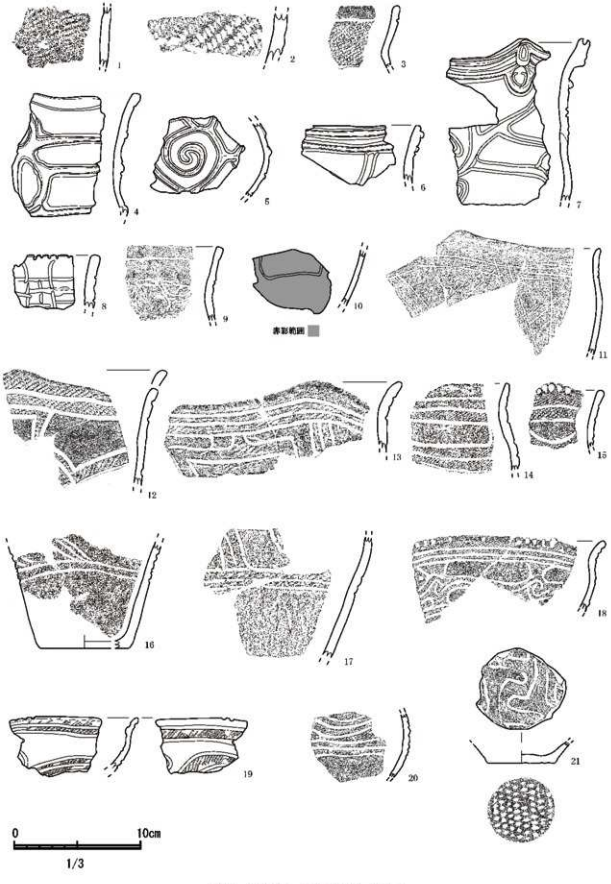


図25　舘遺跡　遺構内出土土器１

第1号堀跡

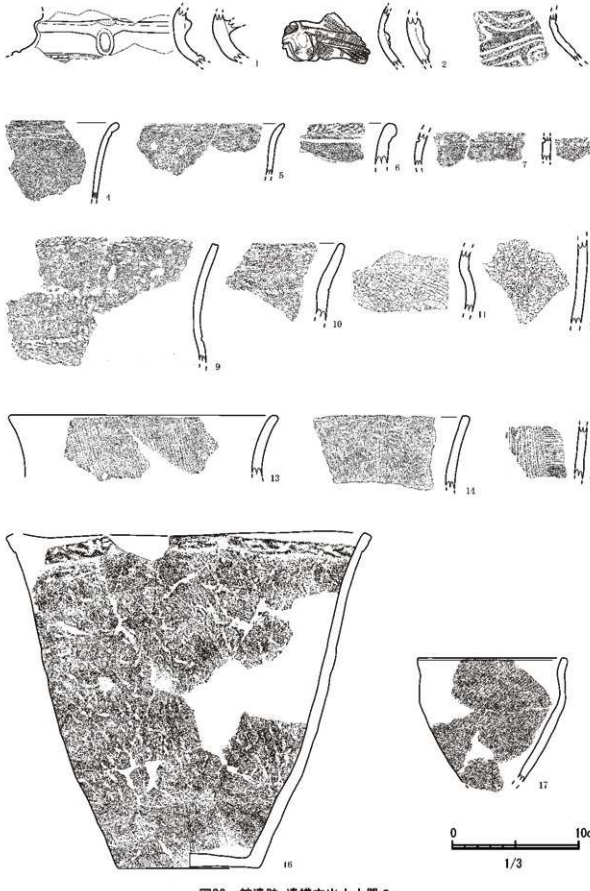
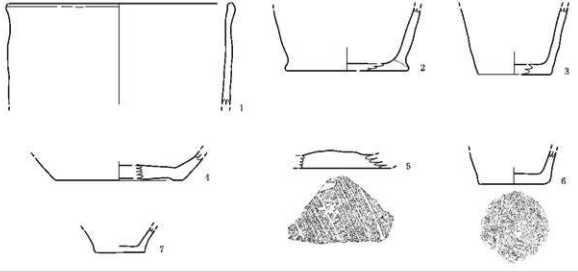


図26　館遺跡 遺構内出土土器2

第１号堀跡



第１号溝跡

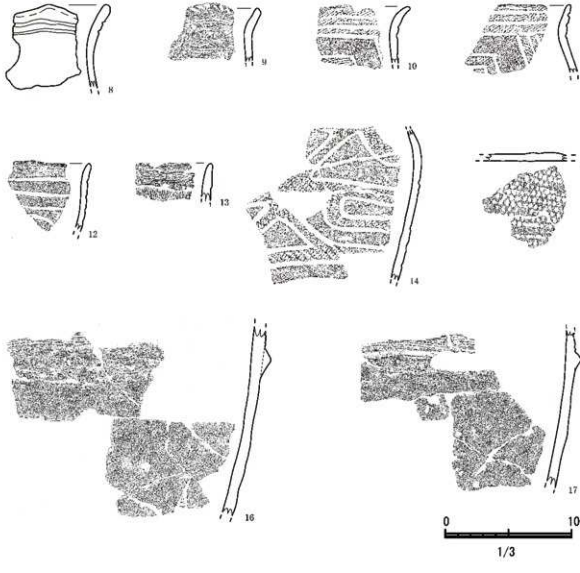


図27　館遺跡 遺構内出土土器３

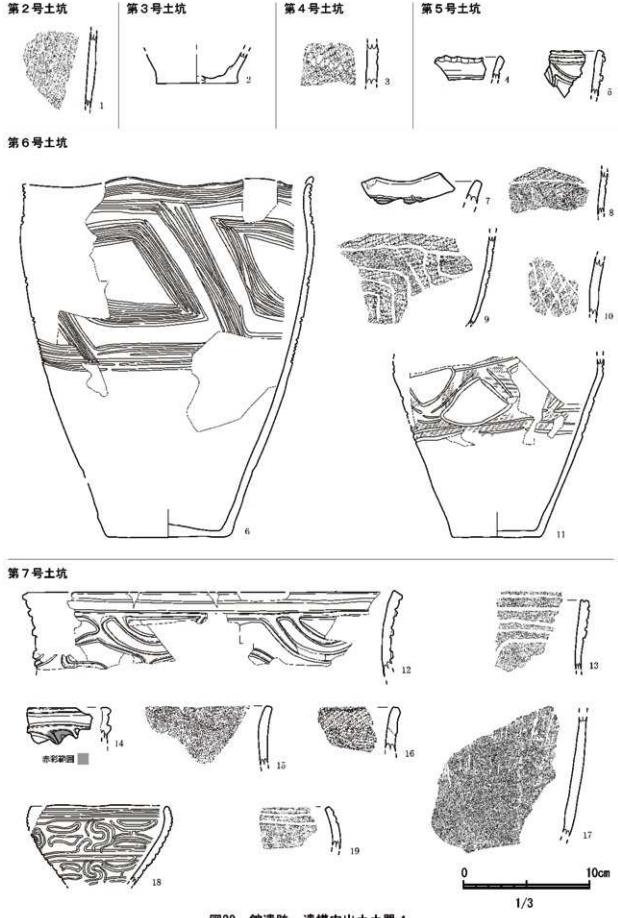


図28　館遺跡　遺構内出土土器4

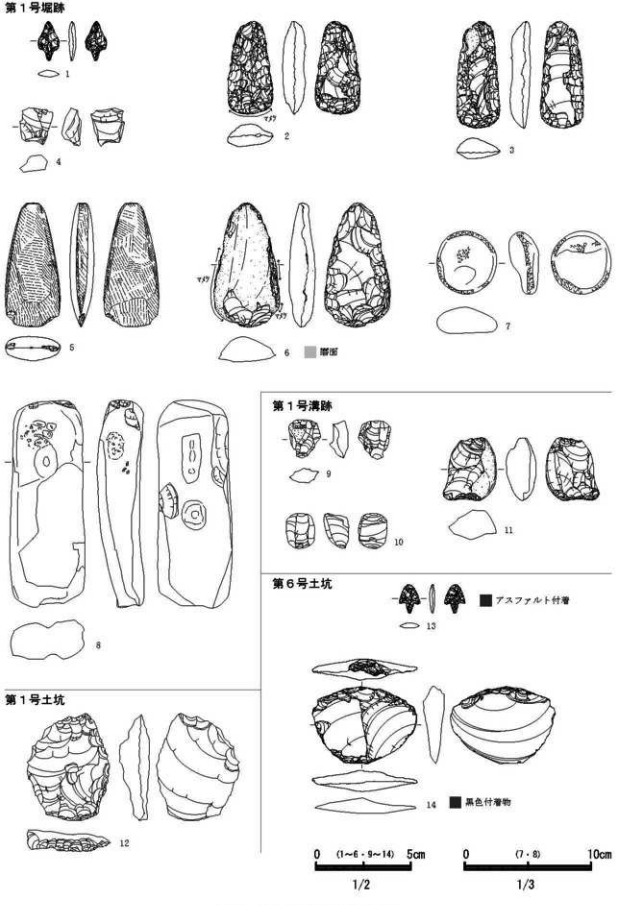


図29　館遺跡 遺構内出土石器